

論 説

マキアヴェッリ諸作品の連関（２） ——リーダー像を中心に——

笹 倉 秀 夫

はじめに

第１章 『カストルッチョ＝カストラカーニ』——軍事リーダーの具体像

第２章 『戦争の技術』——リーダーはどう戦うか

- １ 市民軍重視・反傭兵
- ２ 訓練と紀律化
- ３ 戦場におけるリーダーの知と徳
 - （１）統率力
 - （２）指揮官のリアルな思考・賢明さ
 - （３）策略
 - （４）道徳・正義の尊重

第３章 『君主論』——君主のモデルは誰だったか（以上93巻1号）

第４章 『ディスコルシ』——前章までに扱わなかった重要論点を軸に

- １ マキアヴェッリは君主主義者か共和主義者か
- ２ 民衆観・自由な国の民衆讃美
- ３ リーダー論
 - （１）リーダーの重要性
 - （２）リーダーのモデル——キュロスとスキピオ
 - （３）リーダーの厳格さと人間味
 - （４）軍事・政治の闘い方
 - （５）僭主（独裁者）嫌悪

４ 法・制度の重視

５ 結び

第５章 西洋古代・中世の戦術論——マキアヴェッリ思想の土壌・先駆者

- １ クセノポン

2 早法 93 巻 2 号 (2018)

- (1) 部下の忠誠心をかちとるには
- (2) 策略

2 フロンティヌス

- (1) 指揮官のリアルな認識・賢明さ
- (2) 紀律
- (3) 策略
- (4) 道徳・正義の尊重
- (5) 人間味

(以上本号)

3 ウェゲティウス

- (1) 指揮官のリアルな思考・賢明さ
- (2) 紀律・訓練
- (3) 策略
- (4) 一般命題

4 中世の戦術論——古代の影響下での展開

- (1) オノレ = ボネ
- (2) クリスティース = ド = ビザン

全体の結び

第4章 『ディスコルシ』

——前章までに扱わなかった重要論点を軸に

先に見たように、『君主論』の重要な15の論点は、そのほぼすべてが『ディスコルシ』でも重要な論点としてあった。しかし『ディスコルシ』は、『君主論』よりはるかに大部だから、重なっていない重要な論点ないしはるかに詳細な議論も多く含んでいる。マキアヴェッリを考えるに当たっては、それらをも押さえる必要がある。この作業を、ここでおこなう。『ディスコルシ』の重要論点はその全142章の章数以上にあるが、ここで扱うのは、①マキアヴェッリは君主主義者か共和主義者かの問題、②かれの民衆観、とくに自由な国の民を讃美する姿勢、③リーダー論、④法を重視すべきだとする立場、の四つである (③・④は『君主論』にもあった)。

1 マキアヴェッリは君主主義者か共和主義者か

まず、マキアヴェッリは君主主義者だったのか共和主義者だったのかの、古くからあり、今でも論争対象である問題を検討する。『君主論』を軸にマキアヴェッリを見る人の多くは、かれを君主主義者だとしてきた。他方、『ディスコルシ』を軸に見る人の多くは、かれを共和主義者だとしてきた。君主主義者説は長い間通説であったが、ハンス＝バロン、ポーコック、スキナーらの研究の影響下に、1980年代以来、英米で共和主義者説が強まってきた。たとえばバロンは、マキアヴェッリは本来共和主義だったが、再就職のため『君主論』では君主主義を装い、再就職をあきらめた後は共和主義者として落ち着き『ディスコルシ』を書いたとする。⁽⁹⁾

しかし『ディスコルシ』や、1520年末頃の「小ロレンツォ公没後のフィレンツェ統治論」⁽¹⁰⁾を読めば、第三の説が言うように、かれが混合政体論者だったことは明らかだ。君主主義か共和主義かの二者択一ではないのだ。

混合政体論の先駆は、アリストテレスやポリュビオスである。混合政体論は多様だが、〈君主政、貴族政、民主政は、それぞれに欠点があり腐敗を免れない。欠点・腐敗をなくすためには、それぞれの政体がもたらす問題を、他の二つの政体がもつ力によって抑え、全体としての健全性を確保する道、君主政、貴族政、民主政の三つを混合した政体が良い〉とするのである。マキアヴェッリは——誰の影響を受けてのことかは分からないが——混合政体論をとっている。

すなわち、『ディスコルシ』第1巻2章によれば、このような混合政体を天才的に作り上げた一人が、スパルタのリュクルゴスであった。実際、スパルタの国制は、2人の王、貴族（長老会をもつ）、そして平民（民会を

(9) Hans Baron, Machiavelli: The Republican Citizen and the Author of “The Prince”, in: *The English Historical Review*, 76, 1961, pp. 217-253.

(10) 『マキアヴェッリ全集』第6巻（藤沢道郎他訳、筑摩書房、2000年）所収。

(11) 原田俊彦「アメリカ合衆国憲法と古典古代」（『早稲田法学』第92巻3号、2017年）参照。

もつ) から成っており、そこでは 3 者が相互に他を規制しあうことによって、国の健全性を永らく確保しえた。マキアヴェッリは、これに対しアテネでは、ソロンが民主制一辺倒の政体を準備した；このためアテネは混乱に陥り、ペロポネソース戦争でスパルタに敗れ瓦解した、と説く。

かれは、さらに言う：その後このスパルタを踏襲したのが、ローマであった；ローマは、リクルゴスのような天才的な国制の設計者をもたなかった；しかしローマは、王、貴族、平民が相互に階級闘争を繰り返すなかで、次第に混合政体に近づいていった；王政廃止後の共和政期には、コンスル（最高位者で、定員 2 名。毎年交代）・元老院（貴顕貴族が占める）・民会と護民官（平民の意見を反映）を基軸とした点で、混合政体になっていた、と（私見だが、コンスルよりも元老院が実権を有していたから元老院主席（プリンキパトゥス）が君主に近かった、とも言える）。

マキアヴェッリは、混合政体には君主下のものと、共和制下のものとがあるとし、前者はスパルタに、後者は古代ローマや現代のヴェネチアに見られるとする。そしてその両者においてともに、善い政治の担い手として貴族（ないし貴顕貴族）が重要な働きをしたことを重視する。貴族主軸であるが、しかし平民（上層の）が参加する共和政的混合政体が、マキアヴェッリ自身の立場であった。古代のスパルタやローマ、現代のヴェネチアでは貴族が中心であったから国を長期間安定的に維持しえた、とかれは評価する（第 1 巻 5 章）。マキアヴェッリは——フィレンツェ共和国のために闘った人ではあったが——そのフィレンツェをめぐっても、同等の市民がかなり多いので共和政は不可避だとしつつも（かれ自身、フィレンツェの下層貴族出身で、上層平民にも開かれた市政を考えていた）、メディチ家にも相応の地位を与え、混合政体でいく道を考えていた。

『ディスコルシ』はこの古代ローマを主対象にしているから、共和政分析が中心になっている。しかし、後述するように、『ディスコルシ』で出されている諸命題は、共和国だけでなく君主国にも妥当するものだった。『ディスコルシ』が教導しようとしているのは同時代のリーダーたちであ

るが、リーダーは立派であれば君主でも共和国リーダーでもよい、とマキアヴェッリは考えていた。

たとえばマキアヴェッリは、あとでも扱う第1巻55章で、自由な共和政下では民衆の徳性は高まるとしつつも、君主政下でもその君主に人徳があり、かつ国の法律・諸制度がすぐれておれば、民衆もまた徳性を高めるとの認識に立っただけである。マキアヴェッリは、当時のスペインやフランスの王国が健全性を保ちえている理由として、「それぞれ一人の国王がいて精神的なつながりを打ちだしているばかりでなく、こんにち、なおその新鮮さを失っていない王国本来の法律、制度によって国家に統一を与えているからなのである」と述べている。

共和主義的といっても、マキアヴェッリは——時代の人として——18世紀以降のアメリカやフランスがそうであったような近代的共和主義の立場はまだ自覚していないし、「是が非でも、君主主義ではなく共和主義でなければならない」という立場でもない。かれは、善い君主政は、躊躇なく支持する人である。

マキアヴェッリは、一つの原理からすべてを論理演繹する体系的思考の人ではない。むしろかれは、二つのものが原理的に対立していようともし、頓着しない人なのである。全体としての自分の思想がどういうものになるかを気にしつつ個々の発言を選ぶ人でもない。前に言ったことと、今話し行動していることとの矛盾を、さほど気にすることはないのだ。これは、マキアヴェッリだけの傾向ではない。たいていの古代ギリシャ・ローマ人も、またマキアヴェッリの同時代人の多くの人びとも——真摯なソクラテス主義者・ストア派・キリスト教徒等を除いて——そのような（雑居型の）思考の人であった。かれらは、原理の矛盾に神経質な、一つの原理で自分を律したが、カント的近代人——今日の人間の前提となっている——とは異質なのである。

この点に関して注目すべきなのが、政治においては、悪さ加減が相対的

に少ないものを選ぶべきだという、マキアヴェッリの醒めた思考である。絶対的に良い選択肢はなく、社会制度はすべて長と短を含んでいる。したがって、どれを選んで、必ずマイナス面が出てくる。選択時には、あらかじめそのマイナスにも配慮し、相対的にマイナスの少ない方を選び、とするのである。マキアヴェッリは言う、

「[ヴェネツィアは、平民に武器を与えなかった。スパルタは外国人に市民権を与えなかった。それで国家を長らく維持した。他方ローマは、平民に武器を与え、外国人には市民権を与えたが、それによって力強い帝国をつくった。] したがって、子細に検討してみると、すべてこの世の中の出来事は、一つの具合の悪いことを除くと、必ずといってよいほど、別の都合の悪いことが生じてくるものだということがわかってくる。すなわち、人民の人口を殖やし、さらに彼らに武器をとらせて強固な主権確立のために利用しようとするれば、後になるととても支配者の手に負えない存在になってしまうだろう。

一方、人民を御しやすいようにその数を少なくして、武器も与えずに留め置き、新領土を獲得した場合、それを保持していくどころか、ひどく弱体化して外部からの攻撃にはひとたまりもないものになってしまうだろう。したがって、われわれがなんとしても深く考えておかなければならない点は、どうすればより実害が少なく済むかということである。そして右の点を金科玉条と心得て、事にあたるべきなのだ。というのは、完全無欠で何ひとつ不安がないというようなものは、この世の中にはありえないからである。」(第1巻6章。フランチェスコ・ヴェットーリ宛1514年8月3日の手紙も参照)

古代ローマは市民軍をもつことによって自由な国を維持・拡大してきたが、ヴェネツィアはそれをもたずに独立を保持してきた；古代ローマは外国人を市民として受け入れることで国を拡大してきたが、スパルタは外国人を差別する体制で国を保ってきた；それぞれの政策は、国情・環境によって効果を異にする；どれかを絶対化することは、よくない、と。この点からすれば、君主政か共和政かについても、マキアヴェッリが単純な二者

択一思考にないことは明らかだろう。

そもそも、軍事論で思考を訓練してきた者には、二者択一は体質とはなれない。軍事の世界は、一つの原理ではさばけない、複雑性の世界だからである。

2 民衆観・自由な国の民衆讃美

マキアヴェッリは、人がそれだけを読めば「マキアヴェッリは、性悪論だ」と思ってしまうような発言をよく口にする。『ディスコルシ』第1巻3章の「すべての人間は、よこしまなものであり、自由かつてに振舞える時はいつなんどきでも、すぐさま本来の邪悪な性格を発揮するものだと考えておく必要がある」がその典型だ。『君主論』第17章にも、「そもそも人間は、恩知らずで、むら気で、猫かぶりの偽善者で、身の危険を振り払おうとし、欲得には目のないものだ」とある。

これまで国内外の多くの人が、こうした断言に単細胞的に反応して通俗的マキアヴェッリ像をつくってきた。しかしこの種の発言については、かれが人間をそれだけでしかない存在と見たのか、それとも、或る状況下ではこの面が強まるものだ——しかし他の状況下では反対物となりうるものだ——と見ていたのかを考える必要がある。

実際かれは、他面では「人民が本来もっている傾向が、よいものなのか、または悪いものなのか、どちらかにきめてみたところで、それにはたいした意味があるとも思えない」（第1巻57章）と言っている。しかもかれは、有徳な人民が現におり、またそれをつくり出す道があるともしている。次の引用にあるように、人民は、自由な共和国で——生業を維持しつつ——国政に主体的に関わって生活しておれば、公共心・祖国愛をもつのだ、とかれは考えた。

「個人の利益を追求するのではなくて、公共の福祉に貢献することこそ国家に発展をもたらすものだからである。しかも、このような公共の福祉が守られるのは、共和国をさしおいては、どこにもありえないことは確かである。

「…」 奴隷の状態に陥っている国では、右に述べたこととはまったく反対の現象が見られる。その国において、人民に対する抑圧が厳しければ厳しいほど、かれら固有の良風美俗はますます地に堕ちていく。」(第2巻2章)

これは、公德心の素直な称揚である。かれによれば、古代ローマはこの道によって高い意識をもった自由な市民を産み出し、かれらを基盤にして強い軍隊を確保でき大帝国になった。「マキアヴェッリは、腹黒いリアリストだ」との先入観にとらわれて、こういう発言箇所をもマユツバものとして読み、「マキアヴェッリは、共和国が帝国主義的拡大に役立つから、その限りで共和国を支持するのだ。だからかれの本心は、帝国主義的拡大を求める国権主義にあるのだ」などと、斜に構えた議論をする必要はない。

それが証拠にマキアヴェッリは第1巻55章で、同時代のイタリア人・フランス人・スペイン人の墮落と対比して、ドイツの民衆の有徳性を、古代ローマ市民に劣らないものだと賞賛する。

「マーニャ〔ドイツ〕の地方に目を移すと、その国民の中にはきわめて高度の善意と宗教心とが保たれているのがわかる。この地方では多くの共和国がそれぞれの自由を享受しながら共存しているが、彼らはその国の内外を問わず共和国を支配しようとする一切の企みを寄せつけないように法律を守っているのである。マーニャで、昔ながらの醇風美俗がなお大いに栄えているということを裏づけるために、すでにローマ元老院と平民に関してかかげていた実例によく似た例を示しておこう。

これらのマーニャの共和国では、国の支出のためになにがしかの金を支出する必要に迫られると、施政の責任を持つ行政官または議会が、国の全住民から各人の収入の一ないし二パーセントの課税を取り立てている。さて、その国のしきたりに従って、以上のような決定が通過すると、各納税者は収税官の前に出頭し、まず決められた税額を納めることを誓った。その上で、それぞれの良心に従って、自分が支払わなければならないと考えている金額を醸金箱のなかに投げ入れることになっている。いくら金が入ったかは、当人以外は誰にもわからない。このようなことからしても、この国民の中には、

なお善意と宗教心が根強く存在していることを推測できるのである。」

マキアヴェッリの同時代のドイツ人は——古代ローマ人と共通して——自由な共和国（とくに独立性の強い帝国都市）の市民であることによって、私益でなく公共の利益を尊重し、自分たちの国を守る気概をもった有徳な民衆としてあった。しかもかれらは——古代ローマ人とは異なり——帝国主義的な拡大欲もなく、小さな国に満足し相互に平和を享受しあっている、と。もしマキアヴェッリが性悪論者だったら、あるいはかれが国家の帝国主義的拡大を第一とする人物だったら、有徳性・平和主義のこうした讃美を表すことは、なかっただろう。「マキアヴェッリは、伝統的価値を冷笑するシニカルな人物だ」といった見方だけでは、ここに見られるかれの真摯な道徳的態度を説明することができない。

ところで、マキアヴェッリによれば、民衆を有徳にするには、自由な共和国であることが効果的だが、それだけでは不十分である。そうした自由の下でさらに、①すぐれたリーダーに導かれ、②良い法律・制度に従い、③市民宗教によって結束することによってこそ、民衆は有徳となる。これらは、そうした善い社会生活の効果として人びとを変える力をもっているのである（なお、先に述べたように、君主国もまた、自由な生き方を保障し、かつこれら①・②・③を満たせておれば、かれの讃美を受ける）。

以上のうち、①リーダーについて、および②法律・制度については、後で論じることとして、ここでは、③宗教の重要性について、見ておこう。

敬神の念は、人びとが道徳性を維持するためにも、権威や法律を尊重するためにも、市民として団結し、兵士として勇敢に戦うためにも、欠かせない。マキアヴェッリは言う、

「君主たちでも、また、共和国のばあいでも、それぞれの宗教儀式をきっちり守り、うやうやしくあがめつづけていくことは、なににもましてたいせつなことである。なぜなら、国家にとって敬神の念がおろそかにされるようなこと以上の破滅の前兆はありえないからである」。（第1巻12章）

これは、古代ギリシャ人、ローマ人がとくに重視していたところである。クセノポンの『キュロス伝』や『アナバシス』には、戦闘に入るなど重要な軍事・政治行動に際しては、リーダーが必ず吉凶を占う儀式（いけにえを捧げておこなう）を取り仕切っている。凶と出れば、吉が出るまで行動は見送られる。オナサンドロスも『指揮官』10-25以下で、戦闘に入る前には必ず犠牲獣によって占い、吉と出なければ戦うな、と言う。兵士の心に与える影響を顧慮してのことである。マキアヴェッリがここで念頭に置いているのは、古代のこの宗教性である。これは、占いを信じ切っている立場からの議論でも、宗教を政治に利用するというドライな、シニカルな発想に立った議論でもなく、〈信仰によってはじめてまじめな生き方が確かなものになる、兵士は確信をもって行動することができる〉という、敬神の念を伴った真摯な議論である。

3 リーダー論

(1) リーダーの重要性

古代の歴史書は軍事・政治中心に国の動きを描いており、それゆえ軍事リーダーの振る舞いを軸としている。それを読んで考えを形成していったマキアヴェッリは、古代のリーダーの行動態様を、同時代のリーダー（君主と共和国統治者）に対し範例として示し、また警告する。マキアヴェッリがリーダーに期待するのは、次のようなことであった。

第一に、民衆の思考は即物的で皮相なものとなりがちなので、良い方向に進むにはリーダーによる指導が欠かせない。マキアヴェッリは、民衆というものは適切な指導を受けなければ浅薄のままであって、何が良い意見なのかを識別できないと見、次のように言う：

「人民を納得させようと思えば、まず彼らの目の前に、損か得か、勇ましく見えるか、または臆病に見えるか、ということを並べ立ててやらなければならない。人民の目の前に提示された事柄が、たとえその背後に損失が待ちうけているにせよ、うわべは誰の目にも利益を約束しそうな話であれば、大衆

の首をたてにふらせることなど、いつに変わらず簡単しごくのことなのである。〔…〕こんなわけだから、その行為の背後に、健全さとか、利益につながる道が〔実のところは〕隠されている、外見がぱっとせず、また損になりそうな場合は、いつに変わらず大衆を説得するのは至難の業である」（第1巻53章）

マキアヴェッリはこの認識を、第2次ポエニ戦争で民衆がファビウスの戦術（前述の、ハンニバルに対し、正面戦を避けてその疲弊を待つ持久戦法）を理解できなかったことを根拠に挙げつつ、出している。すなわちマキアヴェッリの上記の民衆観もまた、古代ローマ史の勉強に根ざしている。かれは、この時のローマ人民について、「人民は、多くの場合、うわべの立派さに幻惑されるあまり、結局は自分の破滅にもつながるようなことでも望むものだ」と言う。それゆえ、「人民の信頼を勝ち得ている人物が事の良否を人民にときあかしてやらない限り、国家はどんな災難や危機にみまわれるか知れたものではないということである」（第1巻53章）となる。このように、立派なリーダーが出現して、かれが自分の判断と責任で指導することが欠かせない。そういう自立者が、政治には必要なのである。「新しい国家の設立、または古い制度の徹底的な改革は、一人の人間が単独でなすべきことである」（第1巻9章）のである、と。

第二に、リーダーは、民衆が腐敗してしまっている国において、それを立て直すのに欠かせない。「人民が腐敗していれば、どんなに法律がうまく整備されていたところで、なんの足しにもならない。最高権力を持った一人の人物が出て、人民が健全になるように、法律を守らせるよう舵をとらぬ限り脈はない」（第1巻17章）と。そしてこういう、公共のために尽力する善いリーダーなら、その遂行のために採った手段に問題があっても、許される、とかれは言う。

「こまかい心配りで国家を打ち建てていこうとする者で、私利私欲もなく、ただ公の役にたつことを念願し、自分の子孫のことよりは、祖国を第一とす

る人物にこそ、まさに絶対的な権力を手に入れるために奮闘してもらわなければならない。

だから、その人物が王国を打ち建てたり、あるいは、共和国をつくるのにどのような非常手段をとりあげるようとも、道理をわきまえた人ならば、とやかくいってはならないのだ。たとえその行為が非難されるようなものでも、もたらした結果さえよければ、それでいいのだ。」(第1巻9章)

これはマキアヴェッリスト的な口吻であるが、しかし「非常手段」の行使は国の建設・維持という目的に限定されており、またそれを行使できるのは、傑出した人物(ロムルス、モーゼ、リュクルゴス、ソロンのような)だけである。しかもそうしたリーダーは、絶大な権限を付与される以上、自分に対する厳正な態度、セルフ＝コントロールの人でなければならない。

リーダーは、第三に、激昂した群衆をなだめ理性化するうえでも、重要である。「興奮している群衆を鎮めようとするには、考え深くて権威も高く、また尊敬を集めている人物が、群衆に向かって立つ」ことが必要なのである(第1巻54章)。

(2) リーダーのモデル——キュロスとスキピオ

では具体的に、『ディスコルシ』でマキアヴェッリがもつとも尊敬しモデルにした古代人は、誰だったか。それは——『君主論』に見たのと同様——キュロス大王と、このキュロス大王を手本として生きたスキピオ＝アフリカーヌスだった。

キュロス大王については、前述のように第3巻20章に、「キュロス王の人間味あり慈愛あふれる態度がどれほどの名声をもたらし」たか、と高い讚美がある。

他方、スキピオについては先に第3巻21章で見たように、「人間味と慈悲とで、またたくまにその地方全域を味方につけ」たとある。また、第2次ポエニ戦争中にスキピオは、ティキヌス河畔でローマ軍がハンニバルに敗れた戦い(前218年)において、危険をものともせず父を助けた。そし

てかれは、カンナエでハンニバルに敗北したローマの危機下で、「イタリアを見捨てることは断じてしない」と若者たちに誓わせ、一丸となってカルタゴに対し反撃に打って出た。「以上二つの行動で大スキピオは名声をあげたのである。しかも、スペインとアフリカにおけるその後の勝ち戦は、彼の評判に拍車をかけた」と（第3巻34章）。人間味、親思い、私心のなさ、祖国愛が、その実力と結びつき合うことによって、かれは人びとを引きつけたのだ。

このスキピオについては、次のようなエピソードの強調が注目に値する。かれがスペインでカルタゴノーバの町を陥落させたとき、一人の美しいスペイン女性が捕らえられた。兵士たちはスキピオに、彼女を妾に使ってくださいと提供した。スキピオはこの女性を手厚く保護して彼女の父親である地元の有力者に歸し、かれが差し出していた身代金を彼女の婚約者との結婚の資金にするようにといて返還した。その行為に感激した敵の住民たちは、こぞってローマに帰順した、と。マキアヴェッリは、このスキピオに対する讃美を、次のように表明している。

「こうした振舞いは、共和国において一市民がよい評判を勝ち得て、立派な地歩を築いていく上で、ぜひとも必要なことだ。と同時に、君主が国内で名声を堅持するためにも、やはり必要なことである。なぜなら、公共の福祉にそって、何か類いまれな言動で実例を自ら示すほど大きな名声をあげることがはほかにないからだ。しかもこうした言動を示せば、この君主は度量が広いとか、物惜しみしないとか、正義感があるとかと思われ、領民のあいだで諺やなにかの形で評判になる。さて、ここで本題の出発点を振り返って考えてみよう。これまで述べた三つの理由のどれかに基づいて、仮に民衆が、市民を高い地位につかせたとする。とすれば、判断の基礎は決して悪くはない。しかも、やがて、この市民がりっぱな範を示して名を高めれば、きわめて堅実な基礎に立ったことになる。なぜなら、ここまでくれば、民衆はまず欺かれることはなくなるからである。」（第3巻34章）

実に素直な、古代人讃歌である。ここまで公共のために尽くす、徳のある

リーダーであれば、民衆は安心して運命を託すことができる。そのような国・集団こそ、マキアヴェッリの理想とするものであった。そして上に見たように、そういうリーダーが君主であるか共和国の政治家であるかは、マキアヴェッリにとって重要な問題ではなかった。

(3) リーダーの厳格さと人間味

リーダーは、厳格であるべきか、それとも人間味豊かであるべきか。この点については、古代ローマの2人の軍事的リーダーである、マンリウスとウァレリウス＝コルウィヌスとを次のように対比した議論が、興味深い(第3巻22章)。マンリウスは厳格で、自分の息子さえ軍法違反(偶然に敵兵と遭遇し、受命なしにその指揮官と決闘して相手を倒した)を理由に、死刑にした。マンリウスは、「類まれなる強靱な人物であるばかりか、父や祖国に対して献身的で、上長をこの上なくあつく敬った」。

これに対してウァレリウス＝コルウィヌスは、きわめて人間味豊かであった。ウァレリウスは、コンスルであったが誰に対しても腰が低く、最下級の兵士とも寝起きをともにした。サムニウム人との決戦の前夜にも、いつもと変わらないうち解けた態度で兵士たちと語らっていた。「話をするばあいでも、自分の威厳に心を配るのと同じく、相手の気持も尊重することを忘れなかった。また、彼が高官に命令をくだすときの態度は、あたかも陳情に來た平民のごとくであった」と。リウィウスのウァレリウス像は、クセノポンが描いたキュロス大王(本号39頁)の像と「きわめて一致する」、とマキアヴェッリは書いている。

この2人のどちらを是とすべきかについては、マキアヴェッリは慎重である。かれはまず、クセノポンの『キュロス伝』を前提にして、君主は人間味豊かでなければならないとし、その観点からはウァレリウスに与する。

「けれどもクセノポンに倣って、どうすれば一番君主のためになるか、と考えなければならぬ場合、全面的にウァレリウスの立場を支持すべきで、マン

リウスの行き方は捨てなければならない。君主は兵士や臣下の中に服従心と敬愛の念を植えつけるように努めなければいけないからだ。服従心は、君主自身が法律を守り、力量に富む人物だという評判を得てこそ獲得される。また部下からの敬愛の念は、君主が物腰も柔らかく、人情の機微を察し、慈愛も深く、さらにウァレリウスが具え、クセノボンがキュロスのなかに認めるような、他のもろもろの資質を得てこそ獲得される。」（第3巻22章）

しかしマキアヴェッリは、共和国においては、ウァレリウスのように兵士と親しむことは〈それによって兵士たちをてなづけ、その力を使って僭主になろうしている〉と——スペイン駐留時のスキピオが嫌疑を受けたときのように——猜疑の目で見られるから、避けるべきだと言う。

リーダーが人間味豊かであるべきか厳格であるべきかについてはまた、スキピオとハンニバルとを次のように対比した議論も、興味深い（第3巻21章）。マキアヴェッリは、「スキピオがスペインにおいてあげたのと同じ効果を、ハンニバルがイタリアにおいて別の手段であげたのはなぜか」と自問する。スキピオは「人間味と慈悲」でスペインを味方につけた。これに対して大軍を率いてイタリアに侵入したハンニバルは、「まったく正反對の手段、つまり残虐、暴行、強奪をはじめありとあらゆる非道を働きながら、スキピオがスペインであげたのと同じ効果をあげた」。

これに対するマキアヴェッリの答えは、人間は「愛と恐怖心によってかりたてられる、したがって愛される者も、恐れられる者も、同じように人民を服従させる」というものであった。スキピオは「愛」に、ハンニバルは「恐怖心」に結びつく。2人のように「力量抜群の人であれば」、すなわち巧みな戦略・戦術で次々と偉大な戦果を挙げた実績の人でかつ大人物であれば、愛によっても恐怖心によっても、兵士の服従をかちとれる。それぞれのやり方がもたらすマイナスは、その人物の偉大さでカバーできる。逆に言えば、そのような力量がある者でなければ、二人を真似ることはできない、ともマキアヴェッリは言う（第3巻22章）。

マキアヴェッリは、国の建設・改革にはこのような偉大なリーダーが2

代以上続くことが不可欠だ、と考える。そのようなことは、君主政では難しい。親・子・孫がそろって偉大であることは、まれだからである。これに対して共和政においては、リーダーは選挙によって選ばれるため、立派なトップが3代以上続くことも可能である。しかしこの共和国でも、民衆が墮落しておれば選挙は腐敗してしまうから、良いリーダーが選ばれることも困難となり、このため政治はうまくいかない、と（第1巻20章）。

（４） 軍事・政治の闘い方

リーダーが身につけ駆使すべき、軍事と政治の技術は、『ディスコルシ』でも、『戦争の技術』におけると同様、主要関心事である。ここでは、そのうちの重要事項を示しておこう。

i) 決断力 古代ローマ人が決断を尊んだことについては前述したが、マキアヴェッリはここでも、かれらの断固たる姿勢を大いに評価する。たとえばローマ人は、他都市を占領する際には、時間と金を浪費する作戦である包囲戦は避け、武力ないし策略で短時間に占領する強い姿勢を示した（第2巻32章）；また、内部分裂した他都市の統一を図るためには、両派のリーダーたちをともに殺害する断固たる態度をとった；これは、今のイタリア諸国のような弱腰の国には難しい；このため現代の諸国は、両派を和解させるか、追放するか甘い処理をする；しかしそのような決断のなさ、禍根を残すだけだ；今のイタリアに内乱が絶えないのは、この甘さが災いしているのだ（第3巻27章）、と。

ローマは、戦闘に当たっては指揮官に十分な裁量権を与えた（第2巻33章）；これは、指揮官が自分の名誉・栄光のために戦う意欲を喚起するため、また決断力によって迅速に処理するため、さらには元老院が現場を知らずに指示を出すことの弊害を知っていたためであった、とかれは見る。『孫子』九変篇に言うところの「君命有所不受」（指揮官は戦場では、事情によっては君主の命令にも従わない）である。

ii) 思慮深さ・リアルな認識 思慮深さは、様々なことに関係する。

(a) 『ディスコルシ』第2巻27章は、「思慮深い君主や共和国は勝つことだけで満足すべきである、さらに高望みをすると元も子もなくしてしまう」と題している。マキアヴェッリは、この点については古代史上の多くの事例を示している。

(b) かれはまた、時間を稼ぐことの重要性を説いている。先にも見たようにマキアヴェッリは、断固たる姿勢、決断力を重視する人である。しかしそれでも、対処すべき「事態がそれほどなまやさしいものでないことがわかれば、しばらくは事のなりゆきにまかせて、どんなやり方にせよ後に手をくだしてはならない。」(第1巻33章)とする。この点に関しても、そうしないで失敗した多くの事例、すなわち下手に手を下して、逆に反撃に遭ってつぶされた事例を挙げ、そこから学べと警告している。次のように、である。

①古代ローマの近隣の諸部族が、勢力を強めつつあったローマを押しつぶすべく一斉に軍事行動に出た。結果は、ローマの総反撃に遭ってことごとく粉砕されていった、というものだった。②ブルータスの一派は、合法的に勢力を強めつつあったカエサルに対し、危険を感じて暗殺行為に出た。その結果、カエサルは殺したものの、カエサル一派から反撃を受けて壊滅した。③1498年以降のフィレンツェ共和国は、舞台裏で穏便なかたちで策動しているメディチ家に危険を感じ、それを討つ強攻策に打って出た(マキアヴェッリ自身、その政権内にいた)。しかし寝た子を起して逆襲され、共和国は瓦解してしまった。

ちなみに、上のうち、①は、軍事に関わる事例、②と③は、政治に関わる事例である。ここではリーダーの行動論が、同時に軍事の場合および政治の場合で相並んで扱われている。マキアヴェッリの頭の中では、軍事と政治とは思考原理を共有しあっており、接合・混在しているのだ。

他にも、たとえば『君主論』第18章の、「国を維持するためには、信義に反したり、慈悲にそむいたり、人間味を失ったり、宗教にそむく行為をも、たびたびやらねばならないことを、あなたは知っておいてほしい。したがっ

て、運命の風向きと事態の変化の命じるがままに、変幻自在の心がまえをもつ必要がある。そして前述のとおり、なるべくならばよいことから離れずに、必要にせまられれば、悪に踏みこんでいくことも心得ておかなければいけない」との言明がそうである。これは、直接的には政治のやり方論だが、それはこのままで戦争のやり方論にもなることは、言明がもつ論理からして明らかだろう。

両者のうちでは戦争のやり方論が古来いち早く、戦術論として発達してきた。この戦術論の思考を、かれは政治の場に応用し、その結果、いわゆる「リアリズムの政治論」やマキアヴェッリズムを発達させた。マキアヴェッリは、『戦争の技術』を *l'arte della guerra* の本と呼び、『君主論』を *l'arte dello stato* の本と呼んでいる。このように両著が *arte* (術) として共通なもの、駆け引きや心理利用、策略の駆使などの *arte* が両著で共有されている事実を物語っている。

(c) 第3巻37章ではマキアヴェッリは、「決戦のまえに前哨戦は必要か」を問い、前哨戦には、一方で、敵の性質を知って作戦に生かすことができ、また兵士たちに自信を与えるメリットがある。しかし逆に、兵士が敵の強さを目の当たりにして自信を喪失するにいたるデメリットもある。したがってリーダーは前哨戦に対しては、ケースごとに友・敵、状況を踏まえて慎重に判断する姿勢が必要だ、とする。そしてこの点について、「どんなよいことにも、なにかと都合の悪いことが背中合わせとなっているという事実である。この短所は長所ときわめて固く結びついて発生するものだから、短所をも受け入れないかぎり、成功はおぼつかない。しかもこの傾向は、人間が演ずることなら、なにごとによらずついてまわるものである」と、ものごとを長所・短所を併せ見つつ冷静に計算する必要を説く。この姿勢は、先にも見た(本号5～7頁)。

(d) 第3巻39章は、「指揮をとる将軍は地形を熟知していなければならない」と題している。客観的でかつ合理的な認識の重視である。鋭い認識は、戦う相手に関しても必要である。第3巻18章は、「敵の計略を見破

ることは指揮官に与えられた最大の任務である」と題して、敵をよく観察して、その気配から意図するところを読み解くことを提起している。たとえば、「二つの軍が対峙する場合、たいていは両軍とも同じように浮き足立っており、退却の必要に迫られているのがしばしばである。そこで、敵のそのような気配を先に耳にする者が勝利を獲得するのである」とある。相手の心理上の微妙なゆらぎを読み取ってそれを突くことが、大きな成果につながると考えているのである。

(e) 指揮官には、地道に兵士を鍛えていく課題がある。第2巻38章は、「部下の信頼を一身に集める将軍はどのような資質を備えているか」を問う。マキアヴェッリは、そういう将軍は、「数ヵ月間にわたって模擬戦をとおして教練を加え、命令に従い、軍規を重んずる習慣を養う。そして、この体験をもとにして、実戦に臨む確固とした自信を植えつけた」。派手なパフォーマンスではなく、着実に部下を鍛えていくことが大きな結果につながる、と言うのだ。

(f) 指揮官にはまた、先を読みつつ堅実にことを進めていく強靱さも必要である。第3巻11章は、「多数の敵と戦わなければならないばあい、劣勢であっても、緒戦の攻撃に耐えれば勝つことができる」と題し、ただ精神主義で突っ込んでいくのではなく、敵がまず攻撃を仕掛けてくるのを待ち、それに耐えて、敵がそのことで士気を削がれ疲れて動揺し始めたときに打って出る、そのようなしぶとい思考を求める。また第3巻45章では、「敵の攻撃を受けて立つのと、はじめから敵を激しく攻めたてると、どちらの戦法が有利か」を問題にし、古代ローマのファビウスが、ハンニバルが激しく攻撃を仕掛けてくる間は動かずにその攻撃を受け流し、やがて敵が戦意を失い攻撃に疲れたときに総攻撃をかけて打撃を与えた事例を挙げ、前者の選択肢の利点を説いている。

(g) リアルな認識・冷静な判断は、次のようなかたちでも、問題になる。すなわち第3巻48章は、「敵がとほうもない失策を犯したとしても、それには畏がしかけてあるものと疑ってかからなければいけない」と題し

て、裏を読む鋭さを指揮官に求めている。

(h) 指揮官には、発想の転換も欠かせない。第 3 卷 44 章は、「尋常の手段では埒のあかない時、荒療治を施すと成功することが多い」と題し、膠着状態下で、迅速果敢に軍を動かして相手を制圧する場所を取り、その急展開に面くらって思考停止となった相手を屈服させる事例が扱われている。

iii) 人間の心理への慎重な配慮 リーダーには、人間心理への慎重な配慮が求められる。すなわち、

(a) 第 2 卷 26 章は、「軽蔑や悪口を事とする者は憎まれるだけで得るところはない」と題している。相手を侮辱しその名誉心を傷つけると、相手は死にものぐるいで反撃してくる。人間、とくに戦闘者には、自分の名誉を守るためには命をも惜しまないところがある。名誉心・恥の感情は、理性を欠いた激越な行動への恐るべき原動力となる。古代以来の史書は、名誉を守るための無鉄砲な行動の記録で溢れている。

(b) 正義感情も、侮れない原動力となる。第 2 卷 28 章は、「共和国や君主が公私いずれのばあいにもせよ損害を受けて、復讐しないことはいかに危険であるか」と題している。たとえば、不当なかたちで損害を被った者がいるのに、その共和国や君主が事件を軽視して加害者を処分しないと、被害者は義憤に駆られて、死にものぐるいでその共和国や君主にも復讐しようとするものだ。

(c) 復讐感情にも、警戒が必要だ。第 3 卷 17 章は、「いちどひどい目にあわせた人物を重要な職や任務につかせてはならない」と題している。自分が侮辱を与えた相手は、恨み・復讐心をけっしてなくさない。表面的には服従を続けても、やがて好機が到来すると、それを一挙に爆発させ、無鉄砲なかたちで仕返しに出るものなのだ。

以下は私見だが、実際日本でも、赤松満祐、明智光秀、浅野内匠頭、板倉勝該、「世直し大明神」佐野政言等がそうであった。人は、損得・勝敗の見込みを冷静に判断して行動するだけの存在ではないのだ。名誉の問題

といい、正義感覚の問題といい、恨みの問題といい、リーダーは相手の感情への細やかな配慮を忘れず、相手の人格の尊厳をまもるべきことを肝に銘じておかねばならない。

(d) 第2巻25章「内紛を重ねている都市を攻撃する場合、内紛に乗じてこの都市を占領するのは賢策ではない」も、興味深い。内紛にある両者は、外敵が攻めてくると知ると、それに抵抗するため、一挙に和解しあい、その盛り上がった共同の感情をエネルギーとして、歯向かってくる。攻撃する者は、この急転に圧倒されて気力を削がれ、大けがをする。

(e) 指揮官は、心理を巧みに利用しもする。第3巻12章は、部下の使い方に関し「慎重な將軍は、部下の將兵を戦闘を避けられない状態に追い込む、また敵に対しては決戦を挑んでこさせぬようにする」と題している。人は必要に迫られると、死守・死闘の覚悟でぶつかっていくものだ。東洋における「背水の陣」である。

この心理は、敵を扱う際にも重要である。敵を一気に窮地に追い詰めると、必死の覚悟でぶつかってくるので、その勢いに圧倒されかねない。^{きゅうそ}「窮鼠猫を囓む」である。したがって、敵にそういう覚悟をもたせないよう、抵抗エネルギーのガス抜きを工夫しつつ戦う必要がある。マキアヴェッリはこの慎重さの模範を、古代ローマのカミユルスに見出した。カミユルスはこの危険性に配慮して、次のように人間心理を巧みに利用する効果的戦術をとった。

「ローマの將軍の中でもずばぬけた智将であつたカミルスは、軍隊を率いてウェイの都市に突入した際、これを難なく掌中に収めるため、また敵を追いつめてかえって死にもの狂いの防御に走らせないため、次のように命じた。つまり、武器を放棄した者には絶対攻撃を加えてはならないということ徹底させ、このことがウェイ人の耳にもはいるようにした。このためにウェイ人は次々と武器を捨て、ためにほとんど無血占領に近い形でこの都市を手に入れることができたのである。それ以後、多くの將軍がこの方法を踏襲するようになった。」（第3巻12章）

追い詰めて決死の団結にいたらせるよりも、逃れられるチャンスを与えて分断する心理戦である。『孫子』九変篇第八一、「^{きし}「^{とど}帰師には^な遏むること勿かれ、^{いし}「^か圍師には^{きゆうこう}必ず^か闕き、^{きゆうこう}窮寇には^か迫ること勿かれ」である。

『君主論』においてもそうだが『ディスコルシ』においても、マキアヴェッリの心理分析は鋭い。心理への注目は、古代からの軍事学が重視するところである。戦いにおいては、武器や人数、地形だけでなく、士気・戦意、焦りや油断、恐怖等が重要だからである。

iv) 策略 『ディスコルシ』でも、『戦争の技術』や『君主論』と同様、軍事と政治における策略が重視されている。ここでは、策略に関する原理論を中心に考察しておく。第3巻40章「戦闘に際して策略をめぐらして敵を欺くのはむしろ立派なことである」で、マキアヴェッリが次のように総論的に述べていることが、この点で重要である。

「一般の事柄では、どんな場合でも、策略をめぐらして相手をたぶらかすことは、忌みきらうべきことである。しかしながら、ただ戦争においては、称讃に値し、名誉ともなることなのである。[…] これと同様の意見は、偉人伝を書いた人びとも持っていたようである。つまり、計略によって勝利を得たことできわめて有名なハンニバルや、その他の人びとの行為を伝記作家は称讃してやまない。[…] ただ、次のことだけは言っておきたい。つまり、君が公言した約束や、結んだ条約の破棄を意味する策略が称讃に値すると私が言うのは、なにもきめられた同盟や、締結された条約を破廉恥に破ってしまうということを意味しているつもりはないということである。というのは、これまでも論じたように、奸計によって共和国や王国を手に入れるようなことがあっても、その行動は、名誉にも何にもならないからである。私がここで対象としているだまし討ちというのは、最初からこちらを信用していない敵に対してこそ、用いるべき性格のもので、戦争の駆引きだけに使うべきものである。」

ここでは、日常生活において策略を使うことは道徳に反するので許されないが、それを「戦争の駆引き」に使うのは別で、それによる勝利は名誉と

なる、とある。ここに見られるのは、『君主論』を「悪の教科書」とする人びとがもつイメージからすれば意外なほどに遠慮がちな、策略の提唱だ。

そしてこの引用文からは、マキアヴェッリのマキアヴェッリズムがどこから来たもので、どういう場のためのものかも、明らかとなる。先にも述べたが、軍事では道徳や正義に反する戦術をも行使して敵を打ち破るのが、古今東西、常道である。そのようなかたちでおこなわれる戦争を記録した古代の歴史書を読み、またそのリーダーたちについて書いた軍学書を読み、マキアヴェッリは策略の重要性を確認した。これを踏まえてかれはこの引用文中では、策略の行使を——戦争に限定して——容認し奨励するのだった。そしてこうした策略や暴力の行使を政治の世界でも容認すれば、「マキアヴェッリズムの成立」となる。実際、『カストルツォ＝カストラカーニ』や『君主論』中ではマキアヴェッリズムが、政治の手段としても出されている。

〈政治における策略〉は、『ディスコルシ』でも扱われている。前述の第2巻13章に見た、古代ローマが国として成長していく際に使った策略（同盟政策の利用）が、その典型例である。また、第2巻13章は、「実力によらず欺瞞の策で大きな幸運をつかみ、下賤の身から最高の地位にのし上がる者もある」と題し、クセノポンの『キュロス伝』を踏まえて、リーダーは一般に軍事のみならず政治でも「策略」に訴える必要がある、とする。

マキアヴェッリズムはマキアヴェッリの発明品だと思っている人が多いが、マキアヴェッリズムは、先にも見たとおり、リウィウスの『ローマ建国史』やクセノポンの『キュロス伝』などの古代の軍事や政治を描いた本に頻出している。マキアヴェッリは、それらを学び取ってまとめ上げつつ、『君主論』等で提示していったのである。

その際、クセノボンやリウィウスらの作品は、軍事・政治と道徳の分離や、伝統を冷笑するシニシズムをけっして前提にしていなかった。古代のリーダーたちは、策略や暴力、マキアヴェッリズムを行使する際に、政治

と道徳の分離論やシニシズムに立つことによって初めてそういう見地に立てた、ということではない。かれらは、〈リーダーと一般市民とは、ともに有徳であるべきだ〉とまじめに考える一方で、そうした反道徳の手段に訴えることをも辞さなかった。このような古代人たちから思考を学んで書いているマキアヴェッリである。それゆえ、かれについても次の点に注意が必要である。すなわち、軍事や政治における策略・マキアヴェッリズムや暴力をかれが強調しているからといって、「マキアヴェッリは軍事・政治と道徳の分離論者だ」とか、「伝統を冷笑するシニシズムの人だ」とかとはならない。先にも述べたが、道徳と策略を共存させているマキアヴェッリの思考を考える際に、論理的・一貫性にこだわるわれわれの時代の思考だけで処理しようとしてはならないのだ。

とはいえ、策略とリーダーの徳の高さとは、いつの時代においても突き詰めて考えると簡単には共存させがたいものである。この点もマキアヴェッリは、意識していた。かれは、言っている、「一国の政治体制を再編するのには、高潔な人物がどうしても必要である。一方、力づくで国家の支配権を手中に収めるには、悪知恵の働く男でなければならない。しかしながら、高潔な人物が君主になるために、その志がどんなに立派でも、感心できない手段をも用いることは、きわめてまれにしか見られない。」(第1巻18章)では、「高潔さ」と「悪知恵」・策略、立派な志と悪しき手段とは、どう関係させあうべきか。これは、先に何度も見たように、政治において、一定の範囲内で、とくに国家の存亡に関わるケースに限定して、策略を認めるというものであった。

v) 正義・道徳尊重の効用 上述のように古代のリーダーは、策略や暴力、マキアヴェッリズムを行使しつつも、他方では正義や道徳をそれ自体として尊重していた。マキアヴェッリは、その正義や道徳を真摯に尊重したことが結果として戦功をもたらしたケースをも重視している。

その典型が、スキピオがスペインで捕虜の女性を父に返したケース(これは先に見た)と並ぶ、カミュルスおよびファブリキウスの下記のケース

であった。マキアヴェッリは、第3巻20章「ローマの大軍よりも、人間味ある一つの行為がファレリイ人に対してより有効であった」において、この三つのケースを次のように並べて、高く評価している。

「カミルスはファレリイ人の都市の周辺に軍を配して、包囲したことがあった。この時、市内の上流貴族の子弟が学んでいた学園の一教師が、カミルスとローマ軍の歓心を買おうと考えた。彼は城外において実習を行なうというロ実を作って、カミルスの陣営へ生徒を連れて行った。そして生徒をカミルスに引き渡し、彼らを人質にすれば、この都市はあなたの手に落ちましようと言った。だがカミルスは贈り物を受け取らないばかりか、この教師をまる裸にして後手に縛りあげ、生徒の一人ひとりに鞭を渡し乱打させたあげく、生徒の手で市内に送り返した。ファレリイの市民はこれを聞くと、カミルスの人間味と純粋な気質に非常に感銘を覚え、これ以上防衛する気も失って、ローマの軍門に降ることに決めたのである。

この適切な一例から考えなくてはならないことは、時によっては、非情で激烈な行動に出るよりも、人間味のある恩情あふれた行動を示すほうが、人間の心にはるかに訴えるということである。軍隊や武器や、人のふるう他のいかなる力によっても落城しなかった都市や地方が、ただ一度の人間的な恩情に満ちた、高潔で寛大な行動に屈伏してしまう。前の例以外にも、歴史にはこの種の例は数知れずある。

ローマ軍はピュロスをなんとかイタリアから駆逐できなかった。たまたまピュロスの側近の一人が主人を毒殺しようとローマ人に申し出たのを、ファブリキウスはこれをピュロスに通じたので、ファブリキウスの寛大さがピュロスを撤退に導いた〔前287年〕。また、スキピオ・アフリカヌスが非常な名声をあげたのは、スペインの新カルタゴ〔カルタゴ・ノヴァ〕の攻略にもまして、若く美しい夫人に一指も触れずに夫に送り返した、あの高潔な振舞いのおかげであった。彼のこの行動の評判は、スペイン全土の人びとの共感を呼んだからである。さらにまた、立派な人たちが示した気風を、どれほど民衆が期待し、またどれほど著述家、つまり君主の一生を描き君主の生き方の規範を立てる著述家が褒め称えているか、周知の通りである。」

確かに、指揮官の人道的な振る舞いは功利計算とは常は無縁だ、というものではない。たとえばオナサンドロス『指揮官』38-1～38-7、42-18～42-22、42-24で、敵の町を占領したときは、住民に対し人道的に振る舞うよう説いているが、これは次の功利計算による。そのほうが住民が必死に抵抗することを避けられるし、他の町も進んで降伏するだろうし、自分の隣国人からのねたみを避けられるから、である。

これとは異なり、上述の3人（スキピオ、カミユルス、ファブリキウス）は、あらかじめ計算したうえで正義や道徳的な振る舞いをしたのではない。心底から真摯である行為に出、それが結果として、予想もしなかった軍事・政治上の効果をもたらしたのである。ここで3人を讃えるマキアヴェッリは、まじめな道徳論者としてある。われわれは本稿で、そうした事例をすでにたくさん見てきたのだから、もう安心して素直に、マキアヴェッリをそういう人だと受けとってよいだろう。

（5） 僭主（独裁者）嫌悪

実力あるリーダーは国家に不可欠だが、実力のある者ほど、巧みに僭主（独裁者）化していく危険をももつ。かれ自身が成功に酔って変質していくことがあるし、その後継者が威を借りつつ権限を拡大させ独裁化していくこともある。マキアヴェッリは、コジモ＝デ＝メディチを念頭に置いて、ある有能で高潔な若者がやがて危険人物となっていくことを事前に見抜くのは難しいと、警告する。

「もし共和国の中で、ずばぬけた力量を具えた高潔な青年が頭角を現わすと、すべての市民の目がこの青年の上に注がれるようになり、彼らは見さかひもなく、この青年をきそって持ち上げてしまうものである。そのため、もしこの青年が野心の片鱗を抱いていれば、この青年の持って生まれた才能と、この出来事とが重なりあって、たちどころに彼を権力の高みへと押し上げてしまう。そして、市民たちが自分たちの誤ちに気づいた時には、その青年を抑えるにも手の施しようがなくなってしまうのである。もし、またあら

ゆる手だてを講じて強いてそれを実行してみたところで、その青年をますます権力に近づける結果に終わるにすぎない。このような実例は、いくらでもあげることができるのだが、私は、わがフィレンツェに起こった一例を掲げるにとどめよう。

フィレンツェに権勢をふるうメディチ家の礎を築いたコジモ・デ・メディチは、その持ち前の賢明さと、市民が軽率にも彼を持ち上げたおかげで、たいした名声と権力を勝ち得た。そのため彼は政府にとって脅威の種となった。」（第1巻33章）

フィレンツェの人びとは、コジモとそのメディチ家との危険を自覚したのが遅く対抗策を講じることができなかった。コジモはその間に、支持者を着々と固め僭主になってしまった。「力量をそなえた高潔な青年」は、支持者が多い。それゆえかれが危険人物になり、それに気づいた一部エリートたちがかれを排除する行動に出ても、支持者を動員した反撃に遭って根絶やしにされてしまう。その結果、抵抗勢力がいなくなった情况下で、危険人物はその本性を顕して独裁化を一挙に進めていくのである。

マキアヴェッリは言う、僭主は、それまでのエリートに対する民衆の反感を強化し、それを利用して、自分の反対派エリートやその組織を、民衆と一緒にたぶしていく。この結果抵抗勢力・抵抗体がなくなると、僭主は「かえす刀で人民の弾圧にのりだしてくる」。そのときには、僭主に抵抗できる有力者や抵抗の拠点となる組織がすでになくなっているから、「やっと人民が自分が奴隷の境遇に陥ったことを覚った時には、もう逃れる術はないだろう」（第1巻40章）。まるで、ヒトラーやスターリン、さらにはどこかの国で目下着々と進行しつつあることを念頭に置いて書いたようではないか。

こうした展開についてマキアヴェッリは、サルスティウスの本を引きながら、「どんな悪い実例とされているものでも、それがはじめられたそもそのきっかけは立派なものだった」（第1巻46章）と述べている。

僭主のなかでもマキアヴェッリがとりわけ嫌悪しているのは、ユリウス

= カエサルであった。かれはカエサルに対し、次のように激しく毒づく。

「多くの人の筆で最大級に尊敬されているあのカエサルの栄光に、惑わされない人はいないまい。つまり、カエサルをほめそやすような輩は、彼の財力に買収されてしまったか、または、カエサルの名の下で帝国がどこまでも続くものだから、すっかり萎縮してしまって、カエサルのことを好き勝手にしゃべることができなくなってしまった人びとなのである。カエサルについての自由な論評を知りたい人は、カティリナを論じている個所を見るがよい。ここでは、カティリナよりカエサルが、さらに非難を受ける立場になっている。それは、悪事を企んだだけのカティリナより、実行に移したカエサルのほうが非難されるに値するからである。また、ブルトゥスに対する讃辞を見てもよくわかる、論者は、カエサルの権勢に気圧されて、とても正面きって非難はできなくても、カエサルの敵であるブルトゥスを褒めちぎっていることでよくわかるのである。

さて、一国の支配的地位につくほどの人物を取り上げて、ローマが帝国になった後で、法を重んじ賢君の誉れも高かったローマ帝政時代の皇帝たちが、それとは反対の道を歩んだ皇帝に比べて、どれほど称讃に値するものであったかを考えてみるべきだ。」(第 1 卷 10 章)

古代ローマの歴史家たちは、カエサルに買収されたり、かれの影におびえたりして、カエサルを批判できていない；しかしかれらも、隠れたかたちではカエサル批判をしているのだ、とマキアヴェッリは見る。『君主論』の歴史上のリーダーのモデルは、と問われると、カエサルを挙げる人もいることだろう。だが当のマキアヴェッリは、ここまでカエサルを嫌っているのだ。マキアヴェッリはまた、ここで古代ローマの五賢帝を持ち上げることによってカエサルをけなすことをも、おこなっている。こうしたカエサル論も、真摯な政治道徳論としてあり、マキアヴェッリのまじめさを示している。

前にも見たが、有徳な民衆が形成できるのは「その国家が自由な政体の

もとで運営されている場合に限られている」、とマキアヴェッリは言う。なぜかという、民衆が「個人の利益」でなく「公共の福祉に貢献する」ところにこそ国の発展があるのだが、そうした公共の利益が尊重されるのは「共和国をさしおいては、どこにもありえない」からである（第2巻2章）。したがって、自由な生活を享受して繁栄している国に僭主制が入ってくると、「その社会は発展をやめて国力にも経済力にもその将来性はなくなってしまう」。僭主制においては、すべてが僭主の個人的利害に照らし付度して決められるため、行政の効率が上がらない。そこでは民衆が国政への参加を失って自分の世界に閉じこもるので、政治や戦争、経済活動において献身的でなくなり、エネルギーを出せなくもなる。

カエサルはこのようなかたちで、自由の解体・ローマ弱体化の元凶としてあった。「カエサルがローマではじめての僭主となり、ここに至ってローマの自由は再び甦らないこととなった」（第1巻37章）。カエサルは、スラヤマリウス以来の動きの延長線上で、自分にだけ忠誠を誓う兵士を作り上げることによって「祖国を征服」した、のである（第3巻24章）。

以上のようなマキアヴェッリの反僭主論は、かれに貼られてきた「悪の教師」、「専制君主の擁護者」などのレッテルを払拭するに十分なパワーをもっている。これらの議論や、さらにはマキアヴェッリが悪しき君主について「宗教を破壊したり、王国や共和園を破滅に追い込んだり、人類にとって有益でかつ誇りをもたらす美德や、学問や、その他の技能を敵視する者は、破廉恥で呪われるべき存在である。まさに彼らこそは、不信、横紙破り、大馬鹿者、能なし、無為怠惰、卑劣と呼ぶに値する」（第1巻10章）と述べているところなどからは、かれのまじめさ、道徳尊重の基本姿勢がはっきり読み取れる。

4 法・制度の重視

マキアヴェッリの正真正銘の真摯さの、もう一つの徴表として、法・制度の重視がある。次のような言明に見られる姿勢である。

「人間とは必要に迫られない限り、善を行なわないものである […]」。そして、拘束が取り払われ、誰も彼もがやりたい放題にできるようになると、たちどころに諸事万端、混乱と無秩序で埋まってしまうこととなる。だから、飢えとか貧困が人間を勤勉へと駆り立て、法律が人間を善良にされると言われるのである。

実際に、法律の力を借りずに、物事がひとりでにより行ないへと導かれるようならば、法律などは必要ないだろう。けれども、こんな都合のよい習慣がない場合には、すぐさまこれに代わる法律が必要となる。」(第1巻3章)

これは、人間一般についての悲観的な議論に見えるが、実はそういうものではなく、ローマの歴史の一局面をめぐっての議論であり、法・制度の重要性を説く際に前提として出された議論である。

すなわちマキアヴェッリによれば、悪王タルクィニウスが追放されて王制が崩壊したあと、しばらくしてローマの共和政が乱れた。元老院を中心とした貴族が横暴になり民衆をいじめ始めたからである。それによる混乱状態は、「誰も彼もがやりたい放題にできるようになり」、「たちどころに諸事万端、混乱と無秩序で埋まってしまう」といったものだった。しかしこのローマに、やがて民衆を護る護民官が導入され、それに伴って法が整備され、落ち着きが出てきた。ローマが軍事的に強くなったのは、それ以降のことであった。今や、自由と規律が確立されたことによって、善い市民が育ち立派な兵士が確保されるようになったのである。

このようにローマにおいては、善い法律・制度が貴族と平民の対立から生じた。国内に異なる立場・異論があり、それらと正面から向きあったがために、既存の状態・制度を改革する要求を受け容れるかたちで改革が積み上げられて、法律・制度が整備されていったのである(第1巻4章)。

ところで、上で「必要に迫られないかぎり」とあるところの「必要」とは、法律ができており、人びとがその遵守に心がけることを意味する。人びとを法律によって強制して支配する、ということではない。人びとがなすべき行為が明示されており、生活が正しく方向付けられている。そのよ

うな、法律にもとづいた暮らしを通じて、善き行為を習慣化を通じて定着させていくのである。

マキアヴェッリは、日常の政治の場における、法律に従った生活、軍事の場における、組織・紀律の整備（軍法尊重をも含む）が、民衆を教化し徳化するのに決定的に重要だと考える。

「統制がとれて秩序正しく統治される人民ならば、たとえ賢君の誉れ高い君主に対しても、いささかのひけもとるものではない。それどころか、むしろ賢君をしのぐばかりの落ち着き、慎重さ、それに温かい感謝の心を兼ね備えているものだからだ。ところが、君主の側に目を移すと、彼らは法律を無視して勝手気ままに振舞える立場にある。それで人民に比べると、はるかに恩義を裏切りやすいし、気まぐれで、慎重な配慮にも乏しいものである。このように、君主と人民との行動の上に差異が生じてくるのは、彼らが持っているそれぞれの性格に由来するものではない。それは、どちらにしても同じようなものだ。」（第1巻58章）

国家生活における法と、軍隊における紀律とは、同じ働きをする。それらによって、立派な市民・兵士がつくられていくのである。マキアヴェッリは、「軍隊には三種類がある」とし、その第一として、「勇敢でかつ軍規の厳正な軍隊」を挙げる。「軍規の厳正」さからは、「激烈な尚武の気風が生まれる」のだ。その好例が、古代ローマ軍であった：「どの歴史をとりあげても、ローマの軍隊は見事な軍律を維持していたことが確認できる。これも長期間にわたる軍事訓練のたまものに他ならない。というのは、軍規の厳正なところ、なんぴとといえども規則を無視してはなにごともしないからだ。まさにこの規則厳守はローマの軍隊の特徴である」（第3巻36章）、と。

以上のようにマキアヴェッリは、自由に適合的で公正な、善いルール・制度にもとづく社会生活が人間を善いものにする、と考えている。善い社会制度、とくに法を確立し、そこでの習慣化を通じて民衆を善くしていこうというのが、プラトンやアリストテレスら古代ギリシャ以来の、「徳倫

理学 (Virtue Ethics)」と呼ばれる考え方である。マキアヴェッリは、この伝統の延長線上で思考しているのだ。

こうした紀律化のためには、まずはすぐれた指導者が出てこなければならない。しかしそういう人物の出現が、その後も継続して起こるとは限らない。したがって、大切なのは、すぐれた人物が出たときに、かれがすぐれた制度 (法を含む) を確立させ、その後の世代はそれによって生活するかたちで善い状態を確保し続ける道である。「君主政体にしろ、共和政体にしろ、それが長期にわたって存続するためには、いずれもが法律によって秩序づけられていなければならない」、とかれは述べている (第 1 巻 58 章)。

このようにマキアヴェッリは、人間を法・制度によって教育し倫理化することを説く人だった。人間は、教育によって善いものとなるし、そうすることが欠かせない、とかれは信じていた。マキアヴェッリに散見される一見悲観的な人間観もまた、実は——性悪論ではなく——倫理化の可能性を基底にした、条件付きないし限定的な命題だったのだ。この点ではまさに、東洋における荀子の法家思想に似た立場だったのだ。

5 結び

以上を要するに、『ディスコルシ』におけるマキアヴェッリの思考は、『君主論』はもちろんのこと『戦争の技術』における思考とも、驚くほど似ている。これらでもマキアヴェッリは、古代ローマの共和国の政治と軍事に共感し、それらがもつ特徴を反映した議論をしていた。

〈歴史書はその時代のイデオロギーが表出したものであり、それゆえそれらの著者たちがもつイデオロギー (観念や思想) がその歴史認識を歪めている〉との意識が出てきたのは、ようやく 19 世紀中葉に入ってからである。それ以前は、歴史書に描かれた出来事や行為を、今の時代にも直接当てはまるもの、それゆえ、そこから教訓を引き出したり、自分の政治的立場を支持するものとして使ったりするものだと考えられていた。歴史の

「温故知新」的な扱い方である（これは今日でも広く見られる）。マキアヴェッリは、この温故知新の伝統に立ち、古代の自由な共和国とそのリーダーたちに範例を求め、それを同時代人に示そうとした。

マキアヴェッリが古典に見いだした教訓・ものの見方は、上に確認したように、多種多様で数も多い。このことは、〈かれが現在における体験から得た眼でもって、それら古典を整理した〉ということ以上に、その逆の、古代の多様な事例から多様なことを素直に学んでいった、という事実を物語っている。

かれはまた古代人を讃美する点で、古代の伝統を尊重する人であった。これが顕著なのは、『ディスコルシ』においてであるが、先に見たように『君主論』もそれに劣らない。われわれは先に、これら２著が双子であることを確認した。『ディスコルシ』に見られるようなきまじめな古代讃美の政治論者が、同時期に並行して書いた『君主論』においては突如豹変して「悪魔的」ないし「伝統的価値や伝統的倫理学・政治学を冷笑するシニシズム」の人になった、などという——今なお英米で根強い——見方が、本当に思想論・人間論としてありうるだろうか。

では、マキアヴェッリにおいて「悪魔性」や「シニシズム」と結びつけられる、策略・暴力、マキアヴェッリズムや、かれに特徴的なリアルなものの見方は、どこから来たか。何度も述べたように、それは古代の軍事的・政治的リーダーたちの行動態様との出会いからであった。マキアヴェッリは、それらから得たものを、同時代の軍事・政治の考察にも使った。これまでのマキアヴェッリ論者は、古代以来の軍事論や歴史書の知識なしにマキアヴェッリを読むだけだったから、『君主論』等にかかれていたことは、ルネサンス期に突然変異で出現した、悪魔的議論、シニシズムだとしか理解できなかったのである。

古代のリーダーや民衆たちにおいては、一方の、策略・暴力、マキアヴェッリズムや、もののリアルな見方の行使は、他方の、高い徳性の重視と両立していた。マキアヴェッリも、同じパラダイムで思考した。かれもま

た、両項が両立可能だと考えた。したがってかれが、策略・暴力、マキアヴェッリズムや、もののリアルな見方を示していることは、「道徳と政治の分離」とか、「伝統的政治学との決別」とかといったものに定礎してのことではない。このような、近代の側からしかかれを見ない思考では、マキアヴェッリの精神構造は理解できない。

第5章 西洋古代・中世の戦術論 ——マキアヴェッリ思想の土壌・先駆者

これまでの考察で、リーダーが軍事・政治とどう向きあうべきかについてのマキアヴェッリの考え方、モデルとなった古代人の生き様の描写態様は、かなり分かった。本章では、その古代人が実際に軍事・政治についてどう語っていたかを見る。そしてかれらの思考が、マキアヴェッリ自身の軍事・政治の思考と瓜二つであることを確認し、マキアヴェッリの思想・思考を育てた土壌が何かをつかむ。ここで扱う古代人は、古代ギリシャのクセノポン、古代ローマのフロンティヌスとウェゲティウスである。

本章ではさらに、中世ヨーロッパの戦術論をも扱う。古代の戦術論、とりわけフロンティヌスとウェゲティウスは、中世においても教科書としてよく読まれ、中世後期においてはそれに影響を受けた軍事論・政治論が登場している。この結果、〈同様にフロンティヌスとウェゲティウス等に深く学んだマキアヴェッリにおいて見られる、ルネサンス期戦術論の形成、そこにおける戦術論から政治論への展開〉は、中世後期において既に先取りされうる条件があったし、現にその結果、先取りが確認できるのである。この関係での中世ヨーロッパの戦術論に関わる考察の主たる対象は、修道士オノレ＝ボネと、マキアヴェッリの先駆者と評価しうる女性文筆家、クリスティーヌ＝ド＝ピザンである。

マキアヴェッリがクセノポン、フロンティヌス、ウェゲティウスの本を

早くから熱心に読んでいたことは、次の点から推測される。第一に、マキアヴェッリの著作の内容がそれを物語っている。①クセノポンの『キュロス伝』や『ヒエロン』がマキアヴェッリの心酔した本であったことは、『ディスコルシ』と『君主論』から明らかになる。また、②フロンティヌスについては、二つの事例（本号13、53頁）がフロンティヌスの『戦術論』とマキアヴェッリの『ディスコルシ』とで、同じ文脈上で同じかたちで並んで登場している。さらに、③次の事実がある：『君主論』第14章は、君主の第一任務が軍事だとしていた；だとしたらマキアヴェッリは、『君主論』執筆時には軍事の勉強をすでにかなり積んでいたはずとなる；古代・中世、そして当時も、定評があり欠かせない軍事の書といえ、上記の3人（クセノポン、フロンティヌス、ウェゲティウス）の本をおいて他にはなかった。第二に、かれの人生が、それを物語っている。マキアヴェッリはフィレンツェ共和国の軍事部門で重要な働きをし、市民軍をも自ら編成し訓練している⁽¹²⁾。その際には、当時参照可能な軍事の指南書、すなわち上記の古典を、かなり読んだはずである。

マキアヴェッリの思想の根本を論じる場合に、クセノポン、フロンティヌス、ウェゲティウスは、後述するウッド（Neal Wood）を除いて、これまでほとんど重視されてこなかった。マキアヴェッリと古代思想とを関係づけつつ考えようとする人は、いたことはいた。しかしその際には人は、

(12) マキアヴェッリの提案した市民軍編成の方針が、1505年にフィレンツェ共和国政府において採用された。翌年、かれはこの決定を受けて、属領（フィレンツェが支配する周辺農村部）・保護領（支配下の小都市とどの周辺農村部）の数100人の農民を徴兵し訓練をする任務を拝命した。かれが担当した地域は、フィレンツェ北東部のムジェッロ（Mugello）とカゼンチーノ（Casentino）であった（ムジェッロは、マキアヴェッリの母の出身地で彼女が土地をもっていた。また、メディチ家にゆかりのある土地でその別荘があった）。マキアヴェッリの市民軍は、ピサに対する1509年の攻撃に投入されて戦果を挙げ、苦戦続きの一五年戦争を終わらせることに寄与した。しかし、1512年のスペイン軍の侵攻に対しては、フィレンツェ防衛上の重要拠点であったプラトーの町を防衛できず総崩れとなり（大砲の音を聞いただけで潰走したという）、このためフィレンツェ共和国は崩壊していった。

古代思想といってもプラトンやアリストテレス、キケロ等をマキアヴェッリと比較するだけだった。これら哲学者との比較からはきまって、「マキアヴェッリは、古代以来の伝統思想と決別した、政治思想の革命者である」が帰結する。これまでのマキアヴェッリ論では古代思想が、マキアヴェッリを古代から切り離すためにこそ引き合いに出されてきたのである。これでは、マキアヴェッリと古代との関係は、深まりようがない。

なぜ西洋古代の軍事の学ないし戦術論が、マキアヴェッリへの影響の観点から検討されてこなかったか。それはそもそも、西洋古代の軍事の学、戦術論が西洋でも日本でもほとんど研究されておらず、マキアヴェッリ論に活用することができなかったからである（今でも日本で「軍事論」というと、人はすぐに『孫子』に、それだけに向かう。『西洋古典』が完全に欠落している）。加えて、古代の政治・戦争を扱ったリウィウスらの歴史書からマキアヴェッリを解明する、という問題意識も最近まで弱かった。西洋古代の戦術論や歴史書の世界には、軍隊をどのように組織しどう運用するかの議論や、もののリアルな見方、道徳ないしリーダーの徳性の重視、策略・マキアヴェッリズムの使い方などに関わる興味深い議論が豊富にある。マキアヴェッリはそこから多くの知を得たのだが、内外のこれまでのマキアヴェッリ研究者たちは、そのことに着目できない状況下にあったのだ。

西洋古代の軍事の学・戦術論に内在する上記のような複合性を踏まえなにと、たとえマキアヴェッリを古代軍事の学・戦術論と連関づける視点をもったとしても、既成のマキアヴェッリ像に影響されて、暴力や策略、マキアヴェッリズムだけを論じることとなる。本章では、このようにして見過ごされてきた「マキアヴェッリ思想のルーツ」を扱う。

ところで、古代戦術論の考え方がマキアヴェッリの思考と瓜二つであるとした場合、その原因としては、次の三つが考えられる。第一に、マキアヴェッリが直接古代戦術論を学んだから、第二に、古代戦術論の著者たちが参照した先行文献を、マキアヴェッリもまた参照したから（実際、フロンティヌスやウエグティウスは、マキアヴェッリと同様、リウィウスやポリュ

ビオスらの本を基盤にしている）、そして第三に、効果的な戦争を追求していけば、ことがらの性質に規定され自ずとそういう思考に至るという関係があるから、である。この三つとも、本章の検討対象とする。

上記３人の古代人が実際にどう考えていたかを見ることによって、古代人が軍事や政治に求めている徳の態様や、古代人における、徳と策略・暴力、マキアヴェッリズムとの関係、もののリアルな認識などの構造も明らかになる。そしてこのことによって、マキアヴェッリ自身における、軍事・政治と道徳の関係のルーツ、もののリアルな見方のルーツが分かる。

１ クセノポン

クセノポン（紀元前430年頃-354年頃）は、ソクラテスの愛弟子の一人でプラトンとは同窓生である。かれは、すぐれた軍人であったが、端正なギリシャ語でたくさんの本を書いた文人でもある。『ソクラテスの思い出』や『アナバシス』が有名だが、君主論・戦術論の著作である、『キュロス伝』、『ヒエロン』、『騎馬隊長論』も、古来よく読まれてきた。

『キュロス伝』は、オリエントを統一した、アカイメネス朝ペルシャの初代国王キュロス２世（キュロス大王、紀元前600年頃-529年）の——あまり史実に即さない——伝記のかたちで、自分の軍事・政治思想を記述したものであり、君主鑑の初期作品の一つである。『ヒエロン』は、反僭主の立場から書かれた君主論の書であり、シュラクサイの僭主ヒエロンと詩人シモニデスの対話という形式で書かれている。『騎馬隊長論』は、別人の作とも言われるが、騎兵向けの戦術論書である。

若いマキアヴェッリは明らかに、これらに大きな影響を受けつつ軍事・政治思想を形成した。かれが『キュロス伝』に描かれているキュロス大王の生き方に感激していることは、先に『ディスコルシ』や『君主論』で見た。かれがそれらの中でキュロス大王について議論していることはすべて、かれの軍事・政治思想の根幹に関わる重要提言としてあった。

以下では、クセノポン自身がリーダーについて書いているところを、マ

キアヴェッリの似た記述を想起しつつ、見ていこう。

(1) 部下の忠誠心をかちとるには

クセノポンは『キュロス伝』1-6-21以下で言う、「人びとは、自分よりも賢明な者にはすすんで服従する。優秀な医者、すぐれた船長、道をよく知った道案内人に。リーダーは部下よりすぐれていないと、積極的な服従を期待できない」と。こういうかたちで人が服従するのは、第一に、そうしたリーダーの下でなら安心してしるからである；そこでこの種の安心を与えるためには、リーダーが自分に服従する人を実際に守れる知や技をもっていることを示す必要がある；そして第二に、そういうリーダーなら尊敬できるからである；尊敬は、相手が自分よりすぐれていると思うところに生じる；そこでこの種の尊敬を得るためにはリーダーは、暑さや寒さ、飢え等の苦痛に耐えることにおいてさえ部下より抜きん出ていなければならない；リーダーは、特権に甘んじて楽をしようとせず、逆に兵士以下の生活条件下でも生きられることを示すことによって兵士を超えねばならない、と。『騎馬隊長』6-2は、次のように指摘している、

「兵士の忠誠心は、指揮官が兵士に親切で、食料に配慮し、退却時の安全、休息時の保護に努めておれば、自然に強まる。[…] 指揮官は先のことをよく見通し、兵士のことを細やかに配慮しなければならない。[…] 指揮官が、兵士に求めることは何でも兵士以上にうまくできれば、兵士たちから軽蔑されることはない。それゆえ指揮官は、乗馬等騎馬隊員に必須のすべてのことがらを練習しなければならない。指揮官が落馬せずに溝や壁を飛び越え、土手を駆け下り、投げ槍をうまく飛ばすことを、兵士たちが目撃することが肝腎である。兵士たちが、指揮官は戦術の達人で、自分たちを敵に勝つよう動かすことができるとか、軽率な戦闘はしないし、神の意に反したり、神に供え物をしないで戦闘に向かったりしない、と確信しているときには、指揮官への服従は確実なものとなる。」

部下から愛されるためには、リーダーはさらに、「部下に実際に善いこと、

利益、をもたらす人でなければならない」；そのためには、部下とともに行動し、かれらの喜びや悲しみに共感でき、困っている者に援助の手をさしのべる姿勢が欠かせないとも、クセノポンは言う。『キュロス伝』5-3-46以下によると、キュロスは野営地で食事に兵士や将校たちをよく招待し、和やかな会話で友好を深めた。

キュロスはまた、将校たち一人ひとりの名をよく覚えており、指令を出すときには直接相手と向き合い、その名前を呼びつつした；将校の名を呼ぶのは、人は、上司が自分の名をよく覚えていると知れば〈自分の能力が認められ今後ともそれを発揮することが期待され注目されているのだ〉と意識して励むし、〈上司をがっかりさせまい〉として緊張するものだからであった；また、人は、名を呼ばれて命令されると、責任の所在が明らかなので任務をしっかり果たそうとするものでもある。

キュロスはさらに、兵士たちが野営テントで100人単位で共同生活することを重視した。それによって育つ仲間意識が、戦闘の場でも紐帯となるからである；相互に仲間として緊密に結び合っている軍隊は、脱落者を防ぎ、困難な状況下では励まし合って大きな能力を発揮するものだ。

キュロスは敵に対しても、人間味によってその心をとらえた。「捕虜に対しては人間味をもって接し、征服した国の民は武装解除し、生業に励むようにした。」たとえばキュロスは、アルメニアを支配下に置いたあと、アルメニアと領土を争っていた隣国に軍を進めそれをも平定した；このときかれは、その隣国の未利用の草地をアルメニア人が放牧に使い、その見返りに隣国に地代を支払うようにさせ、双方に利益となる友好への道を選ばせた。

とはいえ、キュロスは甘い一方のリーダーではなかった。かれは、狩猟による訓練を積み重ね、かつ軍隊生活を工夫して兵士が不断に活動している状態をキープした；たとえば、労働や訓練で体に汗していない者は、食事にありつけないという規則を制定した。怠惰は、兵士を弱めるだけでなく、脱走等を引き起こすからでもある；かれがアッシリアに進軍し、その

大軍と正面戦を闘った際には、ペルシャ軍は鍛錬されているうえに紀律もしっかりし、士気も高かったので、有利な戦いを展開しえた（しかしかれは、敗走しはじめたアッシリア軍に対しては、相手が大量であったため深追いを避けた）。（以上、『キュロス伝』 3-2）

リーダーの厳格さと人間味とについては、クセノポンが『アナバシス』（岩波文庫102-104頁）で、スパルタ出身の傭兵軍隊長クレアルコスの峻厳さについて述べていることが、キュロスとの対比で興味深い。クレアルコスはスパルタで、軍命に従わなかったことを理由に死刑判決を受けペルシャに亡命した。ペルシャは内戦中で、兄アルタクセルセス王に齒向かう弟王（かれの名もキュロスである）に、かれは雇われた。クレアルコスは、天性の戦争好きで、統率者としては定評があった。このクレアルコスについて、クセノポンは言う、

「自軍に必需品を確保する方途を講じ、これを調達する能力にかけては他の追随を許さず、同席する者たちに、クレアルコスの言葉には従わねばならぬという気持を起させる能力も、また拔群であった。それができたのは彼の性格の峻厳さによるもので、事実彼は険しい顔付きをしており、声も荒々しかった。懲罰は苛烈で時には憤怒にまかせて罰を加えることもあり、後で自らそれを悔いることも稀でなかった。懲罰を加えるのは彼の主義に基づくものであった。軍紀のゆるんだ軍隊は物の用に立たぬと彼は考えており、兵を歩哨に立たせるとか、味方には手出しさせぬとか、または遅疑せずに敵に立ち向わせるなどのためには、敵よりも指揮官を恐れさせねばならぬ、と彼は言ったと伝えられている。それ故、兵士たちは危機に際しては、全面的に彼の言葉に服し、彼以外の者に従おうとはしなかった。実際そのような場合には、彼の暗鬱な顔が他の顔の間で輝いているように思われ、その苛烈さも敵と相対しては力強く頼もしいものに見え、救われた想いがして、もはやそれを苛烈とは感じなかった、という噂であった。

しかし一旦危地を脱し、他の指揮官に仕える機会が訪れた場合には、彼の許を去る者が多かった。彼には人を惹きつける魅力がなく、常に峻厳で粗野

だったからである。兵士たちと彼との関係は、子供たちと教師との関係に似ていた。そういうわけで、彼は親愛の情や好意をもって従う部下を持つことは嘗てなかった。しかし一方、国家によって配備されたり、貧窮のためとかその他止むを得ぬ事情に縛られて彼の配下に入った者たちには、絶対服従を守らせていた。兵士たちが一たび彼に従って敵を制圧し始めると、日頃の教育が麾下の兵士たちを有能な戦士たらしめるに絶大の効果を示すのであった。敵と相対し毅然としてたじろぐことはなく、処罰を恐れる心が彼らに規律を守らせたからである。」

紀律重視の厳格な指揮官は、恐れられるから服従を確保はできる；しかし兵士たちから愛される存在でなければ、積極的な服従、心服は勝ち取れない、とクセノポンは考えるのである。先にマキアヴェッリに見たのと同じ見解が、ここに出ている。

（２） 策略

クセノポンは、『騎馬隊長』第5巻9-11章で、「戦争においては、敵を欺くこと以上に有利なものはない。〔…〕戦争での勝利、しかも最大の勝利のほとんどは、敵を欺くことによって得られている」と書いている。「兵は詭道なり」（孫子）である。実際、『キュロス伝』には、キュロスが使った策略の事例が、次のように示されている。

従属国である隣国アルメニアが離反したので、キュロスは制裁の軍を動かし、このときには、つぎのような電撃作戦をとった；すなわちかれは、それまでに恒例として国境地帯での狩猟をおこなっていたが、今回もそれをおこなうと装って軍を集め、敵の油断に乗じて一挙に隣国に押し入ったのである；敵はあつけにとられて、抵抗できないまま降伏した。征服後はキュロスは、アルメニア人に寛大さを示し、その生業を保証した。（第2巻4章12節以下） 策略と人間味との共存である。

カルディアとの戦争では、キュロスはまず敵地の高所を密かに占領し要

塞化した；そして平地での戦闘に際しては、軍の一部に敗走を装わせ、カルディア軍がそれを追撃してきたのを、要塞にいる伏兵によって急襲し、壊滅させた。(2-3-2)

難攻不落のバビロンを攻略する際には、事前にバビロンへ、スパイとして忠臣アラスパスを入城させた；アラスパスは、〈罪を犯しキュロスに処罰されることを恐れて逃亡した〉と装ってバビロンに向かい、そこで歓迎されたのである；敵はアラスパスを信じ込み、かれを要職に就け、機密事項にも触れさせた；アラスパスは後日、それら重要情報をもってキュロスのもとへ帰還した。

このスパイ行為を支えたのは、アラスパスがキュロスに対してもった恩義だった；アラスパスはかつて、キュロスが人質にしていた、敵国スサの要人の妻の保護監視を任されていたところ、キュロスの信頼を裏切って彼女に懸想して言い寄った；この女性から直訴を受けたキュロスは、しかしアラスパスを咎めなかった；アラスパスは、キュロスのこの寛大さゆえに、キュロスにいっそう深く心腹した。(2-6-1) 王と臣下の深く美しい絆が、上記の反道徳的なスパイ行為を成功させる土台になったのだ。

バビロン攻略に当たってキュロスは、町を貫流しているユーフラテス河の流れを放水路によって減水させる作戦をとった；そして、バビロンの住民が大祭礼ですっかり酩酊している夜に、河床を進軍して(河床部分の)城壁をくぐりバビロンに浸入し、難なく陥落させた。(2-7-5)

クセノポンは『キュロス伝』(1-6-27 ff.)で、少年キュロスがその父カンビュセース王から教授されるという場面設定をとって、戦いを有効に進めるためには策略が重要だという点の原理問題を展開している。少年キュロスが父に、「敵に勝つためのもっとも良い方法はどういうものですか」と問う；これに対し父カンビュセースは、敵をうぬぼれさせ、その油断しているところを撃つ手や、わざと逃げるふりをし、それを追跡するため秩序を乱した敵や、不利な場所に入り込んだ敵を撃ったり、突如向きを変えて敵に反撃したりする手があることを示した；そして、こうした手を使え

るためには、指揮官は、「計略に富み、ずるがしこく、策略的で、欺瞞的でなければならない。つまり、ぬすびとであり強盗であり、あらゆる点で相手を出し抜けなければならない」と答える；これを聞いたキュロスは、「お父さんは自分に、何という人物になれとおっしゃることよ」と驚いた；その驚く息子に対しカンビュセースは、指揮官はしかし同時に、誠実で法を尊重する者でもなければならないのであって、策略と道徳の兼ね合いが重要だと答えている；カンビュセースはまた、これらの策略を学ぶのは、性教育を受ける場合とまったく同様に、人がある程度成長してからでなければならないともする；策略は非道徳を含むから、セルフ＝コントロールができるところまで成長してから学ぶように教育を設計しないと、覚えたことにおぼれて非道徳だけの人間になってしまう恐れがある、と。策略は人間性にとって有害だから心して向き合え、との警戒心である。

『ソクラテスの思い出』においてもクセノポンは、指揮官に必要な資質を示し、その中で策略の資質を、他ならぬソクラテスの口を借りて、次のように強調する。

「指揮官は、知謀に富み、エネルギーで、注意深く、堅忍不拔で、思慮深くなければならない。かれは、愛されるとともに畏れられる人でなければならない。誠実であるとともに陰謀家的でなければならない。慎重でぬすびと的であるとともに浪費的で強盜的でなければならない。気前が良いとともに強欲でなければならない。不動でかつ強襲的でなければならない。その他多くの軍事的能力を、天性としてかつ学習によって、身につけなくてはならない。」（3-1-6）

指揮官は、人徳もマキアヴェッリズムも武力も兼ね備えた強烈な総合人でなければならないのである。

以上のようなクセノポンを読むことによってマキアヴェッリは、君主のあり方として、賢明さや人間味などの徳性、部下や兵士との人間的交わり、さらには策略・マキアヴェッリズムの重要性を学び取った。前述のようにそれは、キュロス大王の姿、かれをモデルにして生きたスキピオの姿

を通して、マキアヴェッリの心の中に深く刻み込まれ、後年のかれの思想の主軸となった。

2 フロンティヌス

フロンティヌス(紀元35-103年)は、古代ローマの軍人で、コンスルやイングランド属州の長官、ローマ市の上水道の管理責任者等を歴任している。かれは、理論的な軍学書『軍事論』(*De re militari*)を書いたが、これは失われた。しかし、それに付属した事例集である『戦術論』(*Strategemata*)は残った。この本は、ギリシャやローマの歴史書から軍事・政治のリーダーたちのエピソードを集め範例として示す。そのまとめ方から、フロンティヌスの思想が分かる。事例は、解説の必要がない分かりやすいものだから、以下ではそれらを整理しつつ並べていく(ここでもいくつかの事例は、これまで『政治の覚醒』等で扱ったものと重なっていることをお断りしておく)。

(1) 指揮官のリアルな認識・賢明さ

フロンティヌスは、指揮官に、友、敵、戦場に対する鋭い観察力、慎重な行動を求める。戦場の観察は、次のようなものである。「コンスルのパウルス(Aemilius Paulus)は、対エトルリア人戦争で、ウェテュローニアの町の近くの野を進軍していたとき、遠くの森から多数の鳥が驚いた様子で飛び立つのを見て、そこに伏兵が潜んでいることを知った。」(1-2-7)先にも見た、『孫子』の「鳥起者伏也」に通じる話である。

また、カンナエの戦い(前216年)における、ハンニバルの鋭い自然観察の事例もある。「カンナエにおいてハンニバルは、ウォルツルヌス川が異なる水質の川と合流し朝方に強い風を起こし、この風が砂や土埃をまき上げるのを観察した。そこでかれは、そのすさまじい勢いの砂や土埃が自軍の後から起こってローマ軍の顔や目を打つように布陣した。敵にとってはこれが重大な障害物となったので、ハンニバルは決定的な勝利をものに

した。」（２-２-７）ハンニバルは、トラシメヌス湖畔の戦い（前217年）においても、朝方に霧が立ちこめ湖岸を覆うことを観測し、その霧を利用して、丘側に伏兵を置き、下の岸边の道を南下するローマ軍を襲い殲滅した。

敵をよく観察して、その習性を利用した事例もある。「コンスルのウェルギニウス（Verginius）は、敵には戦闘が始まると全力で疾走してくる習慣があることを観察で知った。かれはそこで、〈敵が近くまで全速力で来るのを待て。投げ槍も投げるな〉と命じた。敵が息切れしつつ近くまで来たとき、かれは元気なままの兵でこの敵を殲滅した。」（２-１-７）

指揮官はまた次のように、科学的な合理精神の持ち主でもあった。「〔コンスルの〕ガイウス・スルピキウス・ガルスは、月食が近づいたとき、兵士たちがそれを不吉な前兆ととらないよう、あらかじめ月食が起きることを予告しただけでなく、月食はどうして起きるかを解説した。」（１-７-８）古代アテネでも、科学が活用された。「雷が野営地に落ち兵士たちが恐怖にとらわれたとき、ペリクレスは、かれらを集め、全員の面前で二つの石を打合せて火を出してみせた。かれはこのようにして、雷が同様な原理で雲同士の接触で発生するものであることを説明し、兵士たちの恐怖を消した。」（１-７-10）ペリクレスは、偉大な科学者アナクサゴラースに師事した。雷のこの見方は、この師の学説によっている。古来、すぐれた軍事リーダーは、ここまで科学精神に貫かれていた。

指揮官は、兵士たちの^{げんかつ}験担ぎに対しても、醒めたリアルな姿勢をもつことによって効果的に対応した。スキピオはカルタゴ攻略のためアフリカに上陸する時、船から下りたとたんつまりて両手をついてしまった。「兵士たちがそれを目撃して〔アフリカ戦の不吉な前兆だとして〕啞然としているのを察して、スキピオは、その泰然自若さと頭のひらめきによって兵士たちの不安を志気に変えてしまった。」スキピオは、兵士たちに向かって次のように叫んだのだ。「諸君、祝福してくれ。アフリカをもう押さえつけたぞ。」（Ⅰ-７-１）同様なエピソードが、カエサルについても報

告されている。カエサルは、敵地に向かうべく乗船する際に、岸壁で滑って尻餅をついた。兵士たちがそれを不吉な前兆ととるのを防ぐために、かれはとっさに叫んだ。「母なる我が大地よ、お前はわたしを離したくないのだな」。自分が滑ったことをこのように解釈してみせたことによってカエサルは、「自分たちがこの場所に再び帰ってくることを、兵士たちに確信させた。」(I-7-2) 兵士の迷信や迷妄を、かれらは醒めた精神によって破ったのだ。まさにマックス＝ヴェーバーが言うところの「世界の脱魔術化」が、これらリーダーたちによって、既に古代におこなわれていたのだ。

ものをリアルに見る態度は、次のような慎重な姿勢をももたらす。「人は絶体絶命まで追い詰められると死にものぐるいで戦ってくるから、敵には逃げ道を空けなければならない。[...] ローマのマルキウス (Titus Marcus) は、カルタゴ軍を包囲した。かれらは結束して死にものぐるいで抵抗したので、マルキウスは逃げ口を開いてやり、敵がそこから逃れようと隊列を乱したとき、損失を被ることなく殲滅した。」(2-6-2) 東洋における「窮鼠猫をかむ」ないし『孫子』にある「圉師には必ず闕き」である。スキピオについても、「スキピオは、「逃げる敵には、道を開けるだけでなく、それを舗装してやらねばならない」とよく言っていた」(4-7-16)、とある。スキピオの慎重さは、次のエピソードでも伝えられている。「人びとがスキピオに、攻撃意欲が欠けていると指摘したとき、かれは、「我が母は自分を指揮官に産んだのであって、兵士に産んだのではない」と答えたという。」(4-7-4) 兵士には突撃の勇気が、指揮官には冷静な熟慮が、肝腎なのである。

(2) 紀律

フロンティヌスの第4巻(別人の作である)は、古代ローマ人のきわめて厳格な紀律を伝えている。もっとも印象的なのは、カトー (Marcus Cato) の事例である。かれは、「敵地の海岸で数日間出発できずにいた。

ようやくできるようになって、乗船の合図を三度出したが、1人の兵士が取り残された。カトーは全船を海岸に戻らせ、〔全軍が見ている前で〕その兵士を逮捕して死刑にした。かれは、その兵士が敵によって不名誉な死を迎えることよりも、命令違反の罰がどのようなものかを全軍に理解させることを有意義と考えたのである」（4-1-33）と。カトーは、厳格であることで知られているが、ここでの行動の峻厳さは驚くべきものである。この事例は、カトーの非人間的に冷たい功利計算をも、印象的に伝えている。

厳格なリーダーとして、もう1人の古代人の事例も印象的である。スパルタの将軍クレアルコス（前述）である。かれはよく、「兵士には指揮者のほうが、敵よりも恐い存在でなければならない」と言っていた。この言葉の意味するところは、「戦死するかどうかは不確かだが、敵前逃亡による処刑は確実だ」ということにあった（4-1-17）。クレアルコスについては、先に『アナバシス』でクセノポンが同様なことを記録しているのを見た。そこではクセノポンは、クレアルコスの厳格さ、人間味のなさに対し批判的であった。

ローマでは、軍法違反の部隊を懲罰する際には、くじ引きによって何人かを選び出して処刑する方法が、無駄が少なく効果がある措置としてよく使われていた。クラウディウス（Appius Claudius Sabinus）は、戦列を離脱した兵士たちを集め、10人ごとに1人をくじで選び出させ、棍棒で殴り殺させた。（4-1-34）あるいは、「コンスルのルルス（Fabius Rullus）は、敵に向かって突撃せず退いた2軍団からくじで選び出した者を、同僚の目の前で処刑した」（4-1-35）といったものだった。

ローマ軍の紀律の厳格さを示すものとしては、有名な、マンリウスのケースがある。かれは、「自分の息子を全軍の前で、鞭打ったのち打ち首にした。その息子は、敵に勝利したのだが、その戦闘はマンリウスの命令に背いてのものだった。」（4-1-40）マキアヴェッリが取り上げていた（本号14頁）、印象的なケースである。

(3) 策略

策略の事例は、フロンティヌスにおいてきわめて多い。かれは——マキアヴェッリと同様——この事例集めを、楽しみながらおこなったようである（この点での、かれのマキアヴェッリへの影響が推測できる）。

策略についての基本は、「カエサルは、自分は、医師が病気に立ち向かうのと同じ原則で敵に立ち向かうのだ、とよく話していた。その意味は、敵を鉄によってではなく、空腹によって征服する、ということである」（4-7-1）、というものである。『孫子』謀攻篇の「戦わずして人の兵を屈するは善の善なるものなり」の西洋版である。

次のような事例は牧歌的な、今日の人間もよく使う心理作戦である。「ポンペイウス（Gnaeus Pompeius）は、向こう岸に敵が待機しているため渡河できなかった時、野営地から河岸まで行進し戻すことを何日も繰り返す行動に出た。敵がやがて見慣れて警戒しなくなったと判断するや、突如河に軍を入れ、首尾良く渡河した。」（1-4-8）

上手なパフォーマンスで敵を欺いた事例も多い。「アテネのペリクレスは、あるとき、敵のペロポネーソス軍にはめられて、険しい谷間に追い込まれた。かれは、一方の出口に、敵の攻撃に備えるためと見える広い堀を掘った。そして後方には、そこを通して脱出するのだと見える道を整備した。このため敵は、道が整備された側に軍を集中させた。このことを確認したペリクレスは、用意していた橋をその堀に架け、敵の妨害を受けることなく全軍を脱出させた。」（1-5-10）

このほかにも、「スキピオは、デルミヌスの町の攻略に難儀した。その地域一帯の住民が駆け寄せて総出で防衛したからである。そこでかれは軍を、その地域の他の町々の攻撃に向けさせた。すると、攻撃を受ける町々の住民が、デルミヌスの町に送っていた自分たちの兵を防衛のため呼び戻しはじめた。スキピオは、援軍が帰ってしまつて少人数になったデルミヌスの町を総攻撃して陥落させた」（3-4-2）とか、「アフリカの反乱軍鎮圧に派遣されたカルタゴのマハルバル（Maharbal）は、反乱軍が酒好きだ

と知っていたので、小競り合いをしたあと、深夜に逃亡したかのように装って、ワインをテントに残して野営地を空にした。そのワインには、毒と催眠剤の間にあるマンドラゴラが混入されていた。勝ち誇った敵は、テントに来てワインを見つけ、それを飲んで眠ってしまった。マハルバルはこの敵を急襲し、かれらを捕虜にするか殺すかした」（２-５-12）とかといったものがある。

かなり高度の、心理作戦もある。「スパルタのクレアンドリダス（Cleandridas）は、ペルシャ軍と戦っているエジプト軍の支援に来了。ペルシャ軍は、エジプト軍よりもギリシャ軍が強いので恐れていた。かれはこれを知って、ギリシャ軍をエジプト軍の軍旗を掲げて前線に立つよう配置した。戦闘は、互角で展開した。そこでかれは、次にエジプト軍をギリシャ軍の軍旗を揚げさせ前線に投入した。するとペルシャ軍は、ギリシャ軍の大軍が現れたと誤解して、互角であったのにすぐに敗走し始めた。」（２-３-13）

次の事例も、敵の心理をうまく利用したものである。「〔ローマの〕ディディウス（Titus Didius）は、来る予定の援軍を待ちつつ小人数で戦っていた。敵がこの援軍に待ち伏せ攻撃を仕掛けようとしているとの情報を得て、ディディウスは兵士たちを集め戦闘の準備をするよう命令し、かつ捕虜の監視をわざと緩めた。このため数人の捕虜が逃亡し、自軍に帰って〈ローマ軍は戦闘を始めようとしている〉と報告した。敵はこれを受けて、戦闘時に自軍を分散しないよう、待ち伏せのために送った部隊を呼び戻した。このため援軍は、待ち伏せを受けることなく、ディディウスのもとに無事到着した。」（１-８-５）

異様な演出で敵を圧倒したケースもある。ハンニバルがイタリアで使った、牛による作戦である。「ハンニバルは、悪い土地〔狭い峡谷〕に入り込み、食糧不足となり、かつ〔ローマの智将〕ファビウスに迫撃された。そこでハンニバルは、牛たちの角に薪の束を取り付けて山に上げ、夜になって薪に火をつけて放った。牛が走ると、炎が燃え上がる。牛たちは恐慌

を来して山腹を駆け周り、山全体を炎で染め上げた。ローマ軍は、これを見て、天変地異が起こったかとあつけにとられた。ファビウスだけは策略に気がついていて、伏兵を恐れて兵士たちをその場に留めた。そのすきにカルタゴ軍は、妨害されることなく脱出してしまった。」(1-5-28) これは、中国の戦国時代における齊の田單^{でんたん}(紀元前3世紀前半)の、牛による作戦、さらには日本の『源平盛衰記』中の、倶利伽羅峠^{くりから}における木曾義仲の作戦(1183年)と、きわめて似ている。

偽りの約束や偽装を利用して敵を倒すといった、卑怯度が高い手もある。「[Demetrius の息子の] フィリップス (Phillipus) は、エピロスでローマ軍に敗れたとき、退却時にローマ軍から攻撃されないよう、まず戦死者の埋葬のための休戦を申し込んだ。その間に、ローマ軍の見張りが気をゆるめているのに乗じてうまく逃亡した。」(2-13-8) さらには、「アテネのイフクラテス (Iphkrates) は、かれの艦隊を敵艦隊に変装させ、敵側に寝返っていると疑われる海辺の町に向けて航行した。案の定、その港に入ると大歓迎を受けた。かれはそれによってその町の裏切りを確認し、その町を略奪した。」(4-7-23) あるいは、「アテネ指揮官のキモン (Cimon) は、キプロス島の近くでペルシャの艦隊を破り、捕虜の服に着替えて、ペルシャの船でペルシャ軍の港に入ってしまった。ペルシャ軍は、甲板上の兵士の服と船とから、自国の船が帰ってきたのだと思い込んで、警戒しなかった。こうして同日中に、海と陸とで二度、敵を殲滅した」(2-9-10) といったものである。

部下を寝返りを装って敵側に入り込ませ、敵の背後を突いたり、スパイ活動をするというおなじみの手もある。「ハンニバルはカンナエの戦いの際、600人のヌーミディアの騎兵たちを、ローマに寝返ったと見せかけつつローマ軍の陣に向かわせた。騎兵たちは、ローマ人が信用するよう剣と盾を引き渡し、ローマ軍の後方に送られた。戦闘が始まると、かれらは隠し持っていた短剣を取り出し、倒したローマ兵の盾を手にして、ローマ軍を殺戮した。」(2-5-27)

次のものも、同様に寝返りを装って、敵を誘導した事例である。「アテネのアルキビアデス（Alcibiades）は、シュラクサイ攻略を計画した。かれは、駐屯していたカタナの町から、如才ないと見た一市民をシュラクサイに送った。この市民はシュラクサイの民会に出て、〈カタナの住民はアテネ軍にきわめて敵対的であるから、シュラクサイがカタナに加勢すれば、一緒になってアルキビアデスらを倒せる〉と演説した。シュラクサイの全兵士たちは、これを真に受けて、カタナの町に加勢するため出発した。こうして防備が手薄になったシュラクサイを、アルキビアデスは背後から攻めて陥落させた。」（3-6-6）

策略で、寝返り傭兵を敵によって殲滅させた、次のような頭脳戦も、興味深い。「カルタゴのハンノ（Hanno）は、傭兵のガリア人約4000名が給与が数ヶ月間支給されなかったのでローマ軍に寝返りしようとしているとの情報を得た。暴動を避けるため懲罰はせず、かれらに給与を増額して払うことを約束した。彼らがこれに感謝の意を表すると、都合の良い時刻に糧秣を集めることも認めた。かれは次に、信頼できる馬丁を脱走兵を装わせてローマ軍内に逃げ込ませ、ローマの指揮官オタクリウスに〈夕刻に多数のガリア人が糧秣を採りに野に出る〉旨を報告させた。オタクリウスは、この男をすぐには信用できなかったので、伏兵を配置して待ち構える戦術をとった。男の情報通りガリア人がやって来たので、ローマ軍はかれらと戦闘に入った。これは、ハンノには一挙兩得であった。何人かのローマ人が殺害されたし、やっかいなガリア人を抹殺できたからである。」（3-16-3）

同様なケースとしてはさらに、ペルシャのキュロス大王の有名な策略がある。かれは忠実な部下の一人を、わざと公衆の面前で痛めつけて追放した。この忠臣は敵にキュロス大王に対する自分の憎悪を信じ込ませて、ついにはバビロン守備隊長にまで昇った。そしてその地位を利用して、難攻不落のこの町をキュロス大王に渡してしまった（3-3-4）。中身はかなりちがうが、先にクセノポンの『キュロス伝』第6巻で見たのと重なる

ケースである。主従間で相互に強い信頼関係がないと使えない、高度の策略である。

毒や毒蛇を利用する手もある。これは、道徳的には問題が一層ある手段である。「シキュオン (Sicyon) のクリステネス (Clisthenes) は、クリサエ人の町を攻撃しているとき、その水道管を切断した。町の住民が渴に苦しみだすと、かれは水道管をもう一度つなぎ、ヘレボレの毒を混ぜた水を送水した。住民はこれを飲んで、下痢にかかり衰弱した。かれはそこを攻撃し、この町を陥落させた。」(3-7-6) ハンニバルの次の作戦も、印象的である。「ハンニバルはアンティオコス of 王に、敵の船に毒蛇が詰まった壺を投げるよう助言した。そうすれば敵は毒蛇が気になって、戦うことも船の航行作業もできなくなるからである。」(4-7-10)

策略は、味方に対しても行使される。嘘で味方をも欺くこともあるのだ。結果が良ければ嘘も許される、ということである。たとえば、「アテネのミュロニデス (Myronides) は、テーベと勝敗が決まらないまま戦っていたとき、突如右側面の前方に出て、大声で「左側面では、われわれは既に勝利した」と叫んだ。これによって自軍は勇気づけられ、敵軍は恐怖にとらわれ、その日の戦闘は勝利に終わった」(2-4-11)、というものである。

このほかにも、味方に嘘をつく事例は多い。「スッラ (Lucius Sulla) が派遣した外国人の支援軍が、敵に殲滅された。全軍がこの事件でパニックに陥ることを防ぐため、スッラは、「連中は脱走を計画していたので、懲罰のため危険箇所を追いやったのだ」と触れさせた。この嘘によってかれは、重大なピンチを軍紀で覆い隠し、兵士をその厳格さで勇気づけた。外国軍が頼りにならないことは、ローマ人も知っていた」(2-7-3) とか、「スッラは、軍隊の一部が危険な反乱を起こそうとしていると聞くや、敵軍が迫っているとの警報を全軍に直ちに出すよう命じ、全員が武器を取るよう、大声でふれ回らせトランペットを吹き鳴らさせた。すると兵士たちは一致団結して敵に立ち向かおうとしたので、反乱は立ち消えとなった」

（1-8-5）とかといったものがある。こうした嘘を、“salubria mendacia”（健全な嘘）と言う。日本の「嘘も方便」に当たる。

（４） 道徳・正義の尊重

指揮官の道徳的ないし正義尊重の姿勢が敵側を感じ入らせ、武力による行動よりも結果的には大きな効果を上げたことも、取り上げられている。道徳的行為の代表的事例として、アレクサンドロス大王のそれがある。かれは、「ある戦役中、絶世の美人を捕虜にした。この女性は隣接する部族の長と婚約していた。大王は、この女性を一瞥することすら避けるほどに心細やかに保護した。この女性を婚約者のもとに届けたとき、大王はこの親切心の結果として、その氏族全体を味方につけた。」（2-11-6）

正義にかなう行為の事例としては、ゲルマニクスの次のような振る舞いが挙げられている。「インペラートルのカエサル・アウグストゥス・ゲルマニクスは、かれがゲルマン人を征服してゲルマニクスという添え名を得た戦争において、クビー族の領土内に砦を築いているとき、その囲いの内に入ってしまった作物についてクビー族に代金を払うよう部下に命じた。この結果、ゲルマニクスは公正な人だという評判が立ち、部族はこぞってローマに帰順した。」（2-6-7）

スキピオ＝アフリカーヌスがスペインで絶世の美女をその父に無事返したエピソード（2-6-5）や、カミユルスが敵の家庭教師がおこなった背信行為を受け入れなかった事例（4-4-1）や、エピルス王ピュロスの侍医がピュロスに毒を盛ろうと申し出たが、ファブリキウスがこの提案を拒絶した事例（4-4-2）は、先に『ディスコルシ』においてフロンティヌスから援用されているのを見たところである（本号13頁）。

（５） 人間味

厳格で陰謀家で暴力を行使すべき指揮官は、同時にまた兵士を思い遣る、人間味あるリーダーでもあらねばならない。それでなければ、兵士は

かれとともになら死んでもよい、という気にはなってくれない。人間味とは、たとえば次のようなものである。「ある冬の日、アレクサンドロス大王が行軍の先頭にあったとき、焚き火のそばに坐り行軍の兵士たちを謁見したことがあった。ある兵士が寒さのため死にかけているのに気づいて、火のそばに坐るよう促した。そしてかれは、その兵士にこう言った。「おまえがペルシャ人のなかに生まれていたら王の座に坐ると死刑だが、マケドニアに生まれたのだから坐ってもかまわないのだ。」(4-6-3) こうしたちょっとした配慮が、偉大な効果をもつのである。ギリシャ民主主義の名残(平等)をも感じさせるエピソードである。

作戦を練るに当たって、兵士たちの生命を心底尊んだケースもある。「クインツス・ファビウスは、何人かの犠牲者を出してでも是非あの有利な地点を取りましよう」と、息子から促されたとき、「おまえがその何人かに入ってもいいのか」と聞いた」(4-6-1)。(以下、93巻4号に続く)